モノノ怪「不死鳥忌憚」

淵深 真夜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んだ同級生の家に線香をあげに行った帰り道、「私」はモノノ怪を斬る「薬売り」と出会う。

首吊りの鬼。

命を求める人魚。

血と炎の美女。

なりすましの山猫。

子を求める母鳥。

５つのモノノ怪と幾星霜の年月を経て、薬売りは不死鳥の「真」と「理」に至る。

目次

壱・くびれ鬼忌憚
くびれ鬼：序の幕 ―― 1
くびれ鬼：二の幕 ―― 13
くびれ鬼：三の幕 ―― 25
くびれ鬼：大詰め ―― 38
弐・人魚忌憚
人魚：序の幕 ―― 55
人魚：二の幕 ―― 70
人魚：三の幕 ―― 81
人魚：四の幕 ―― 94
人魚：大詰め ―― 107

壱・くびれ鬼忌憚
くびれ鬼：序の幕

「……あの子は和菓子の方が好きだったわ」
手渡した菓子折りが近所の洋菓子屋の包みであることに気付いて、「彼女」の母親はボソリと呟き慌てて私は頭を下げる。
「す、すみません！　ごめんなさい！　あの、わ、私……知らなくて……」
言ってから後悔した。「知らない」なんて言い訳はこの場じゃ最悪だ。
「……何してるの？」
下げた頭を上げられなくなった私に、母親はうんざりとしたような声で訊く。
ミシリと廊下がきしむ音がする。
玄関で頭を下げ続ける私から少しだけ遠ざかって、その人は言った。
「……線香をあげてくれるんじゃなかったの？」
「！　は、はい！　ありがとうございます！　あとお邪魔します！」
私の送ったものと言ったことからして、怒鳴られて叩き出されても文句は言えないと思っていたけど、幸いながら家に上げてもらえた。
我ながら言ってることがなんか妙にバカっぽいので、「彼女」の母親は私を一瞥して小さく鼻を鳴らす。侮蔑や嘲笑の意味合いだったのだろうけど、あまりに覇気がないものだったので気にならない。むしろ、心配なくらいだ。
けど、覇気がないのは当然だ。
冬という季節を無視しても妙に寒々しい廊下。３ｍほどの距離なのに異常に長く感じるその道を肩見せまい思いをしながら一緒に歩き、私は仏間に通された。
そして、１０日ぶりに再会する。
小さな位牌と薄っぺらい遺影となった、同級生。

グレープフルーツジュースとイチゴ大福が供えられた仏壇の前に正座して、私は線香をあげてから手を合わす。ちょっと変な組み合わせだけど、きっと「彼女」が好きなものだったんだろう。
改めて私は「彼女」のことをろくに知らないんだなと思い知る。
「ねぇ」
「彼女」の好きな食べ物すら知らない事を後悔する私の背後で、「彼女」の母親は……娘を亡くした母親は覇気がない声音で私に尋ねる。
「あの子は、何で死んだの？」
その問いに、私は何も答えられなかった。
首を絞められたように息苦しかったのは、きっと私の身勝手な罪悪感だ。

＊　＊　＊

「彼女」に線香をあげてから、私は学校に戻る。早く、5時までに戻らなくっちゃいけないのに、それなのに足が酷く重い。
原因はわかってる。
私は制服のポケットに手を突っ込み、そこに入れていた物を取り出して溜息をつく。
「……最低だ。私は」
ピンク色の、土とかで汚れてはいるけど可愛い小さなお守り袋。
工場とかで大量生産されてるんじゃない？　と思いそうなほど特徴なんかない。どこの神社にでもありそうな、ありふれた無病息災のお守りだ。
私にとってはご利益の期待もしてない、ただそれだけのもの。
けど「彼女」にとっては……。
それ以上考えるのはやめて、お守りをもう一度ポケットの中にねじ込んだ。
考えるな。今更、何をどう言い繕ってもそれは言い訳、身勝手で醜い保身の為の自己弁護でしかないんだから。
どう言い繕っても、私が最低であることはもう変わらないのだから

……、「彼女」の母親の問いにも答えられなかった私でも、せめて自分の心には正直で潔くあろう。
そう自分に言い聞かせて、私は歩き出す。けど、その足はすぐに止まった。
カチンと何かが鳴ったような気がした。
その音に聞き覚えがあるような気がしたから、私はついその場に立ち止まってあたりを見渡す。
何の変哲もない、何か堅い物同士が少しぶつかったような音。
そんな音をいちいち聞き分けられるほど性能の良い耳ではないはずなのに、なぜかその音には本当に聞き覚えがあるような気がした。
けど、いつどこで聞いた何の音かという情報はさっぱり頭に浮かんでこない。
とにかく、辺りを見渡してみてもそこはいつも通りの通学路で、音の正体はわからない。そしてその音にどうして聞き覚えがあったのかもわからないから、消化不良なモヤっとした気持ちを抱え込みつつも私は学校に向かおうと思って一歩足を踏み出すけど、またしてもその足は止まる。
踏み出した足が何かを踏みつけ、それが鈴(りん)っと鳴った。
「！　……何これ？　やじろべえ？　それにしては綺麗」
私が踏んだ物は、蝶、もしくは蛾っぽい形をしていて、翅らしき両端部分に鈴が着いた硝子細工の……本当に何だろこれ？
やじろべえが一番しっくりくるんだけど、それにしてはものすごく綺麗。
金の枠組みで目玉や羽の模様がステンドグラスのような硝子細工。テイストは和っぽいから、着物の帯飾りあたりに使ったらすごく華やかで似合いそう。けど服や着物、髪とかに取り付けらる部品がないから、やっぱりやじろべえなのかな？
まぁ、何にせよ高級そうな物なのでこのままどっか目立つ塀の上にでも置いとく訳にはいかない。そんなことしたら、落とし主が気付いて取り戻すよりも先に誰かにネコババされる。
だから交番に届けるべきなんだろうけど、困ったなぁ。

ここからだと交番は学校から逆方向だし、落とし物ってなんか手続きいるよね？　財布とかじゃないとはいえ、高級そうだから拾った場所とか時間とか詳しく訊かれるよね？

そういう手続きしてたら、５時には間に合わない。

けど、学校の帰りに届けるとしたらだいぶ遅くなる。もし落とし主が探しているのなら、そしてこれがすごく大切な物なら……

「拾って、くれたのか？」

「ぴょっ!?」

踏んでしまったやじろべえ（仮）を拾って、ハンカチで拭きつつ私はUターンして交番に届けるかどうかを悩んでいたら、背後から急に声を掛けられて変な声が出た。

そしてあまりにも変な悲鳴だったから、声を掛けた人も何か後ろでちょっと笑ってる！

私の悲鳴に驚きとかのワンテンポなしで笑ったってことは、初めから驚かす気がちょっとはあったなこの人！

そんな回さなくていい方向に回った頭で気付いてしまったことに軽くムカついて、私は振り返って声かけてきた人を睨み付けた。

睨み付けた……つもりだった。

「……ぽ？」

振り返って、私を驚かせた人を視認したらもう怒りが彼方に吹っ飛んだ。

それぐらい、綺麗な人だった。

どれくらい綺麗な人かと言うと、スマホ全盛期の現代日本で水色を基調に色とりどりの模様が着いた派手な着物を着こなし、履いてるものは高下駄。

そして紫のバンダナ……じゃなくてたぶん手ぬぐいを巻いた頭の髪の色は亜麻色。

そのうっすい髪色が納得なくらい白い肌の顔に、歌舞伎の化粧、隈取だっけ？　それみたいな模様が赤い染料で描かれてる。

そんな派手過ぎてお巡りさん呼ぶより、近所でなんかコスプレ系のイベントでもあんのかな？　と遠巻きにしつつも割と健全な方向に

解釈してしまいそうな格好なのに、その恰好を気にするよりも先に「美人」だとか「麗人」って印象が叩き付けられるほどに、顔の造形そのものが整ってる。
何だこの人！　色んな意味で!!
「……ヒヨコの次は、鳩か」
私が超絶怪しい格好だけど、その怪しさも霞むイケメン具合にパニックを起こして固まっていると、そのイケメンさんはくつくつと喉で笑いながら呟いて、私の彼方に旅立っていたはずの怒りが帰還。
悪かったな！　悲鳴も呆気に取られた声も、なんか鳥みたいな変な声で！
「な、なんなんですか、あなたは!?　私に何か用ですか!?　って、最初に言ってましたね！　これの持ち主さんですか!?」
しかし私には、その人が怪しかろうがイケメンだろうが関係なく初対面の人に笑われた事を怒る度胸はない。
そして「何の用？」と言っている内に話しかけられた言葉を思い出してセルフ回答で、私は拾ったやじろべえ（仮）を突き出すと、イケメンさんはきょとんと深い緑色の目を丸くしたかと思ったら、もう一度笑った。
今度は面白がるようにではなく、口角をわずかに上げる程度だけど確かに微笑んで、女性のような紫色に染まった綺麗な爪を持つ手で受け取って言った。
「……拾ってくれて、ありがとう。助かり、ました」
なんか独特の間があるしゃべり方で礼を言われて、私は「どういたしまして」とすら言えず赤べこのように首を縦に何度も振った。
あぁ、イケメンってずるい！　この笑顔でもう笑われたこと全部許す!!
「ところで、……いいんですか？」
渡してから、そういや本当にこの人のものなのかの確認を何もしてないことに気付いたけど、今更警察でもない私が「本当にあなたのですか？」と訊くのもアレだよね……とか思っていたら、イケメンさんはすいっと手を伸ばして指をさす。

その方向に私が視線を向けると、それは公園の中心にある時計を指していた。
ついでに、その時計の針が指していた時刻は……
「何やら、急いでいたようでしたが……」
「そうですよ！　急いでますよ!!　それじゃ失礼します!!」
もう４時５０分すぎを指し示す時計に気付いて、私はやや逆ギレ気味にイケメンさんに言い返してそのまま学校までダッシュ。
あのやじろべえ（仮）はあのイケメンさんのものってことにしておこう！　何かあの人の得体の知れなさが、あの用途不明なやじろべえ（仮）と妙にマッチしてるし！
よく見たら着物の柄とやじろべえ（仮）の形も似てるし！
そんな無茶苦茶な理屈をつけて納得して走る私は、気付かなかった。
私が立ち止まった最初の理由である「音」が、あの人の背負った小さなタンスみたいな箱の中からまた聞こえたことに気付けなかった。
「――――本当に、巡りあわせの悪いお人だ」
私の背を見つめながら、イケメンさんが呟いた言葉にも気付けなかったから、私は知らない。
あの人が、どんな顔でそう言ったかなんて。
「……そういえば、顔と格好に気を取られてスルーしちゃってたけどあのイケメンさんの耳、エルフ耳だったような……」
こんなどうでもいいことには、走りながら気付けたのにね。

＊　＊　＊

学校に到着したのが５時ちょうどだったから、３階の教室まで２段飛ばしで階段を駆け上がって、息も整えずに教室の扉を開ける。
「おっそい！　何してんのよ！」
教室に入った瞬間、黒板消しを投げつけられた。
胸に当たった黒板消しが、黒いセーラー服をまだらに白く染める。

一瞬にして薄汚くなった私を、中学生にしては派手な髪の色と化粧をしている同級生、樹里（じゅり）と美紀（みき）が二人、ニヤニヤ笑って眺めている。
そんな二人を見ると、もはや怒りどころか自分がみじめだと思う気にすらなれない。
確かに5時を数分すぎちゃったけど、たぶん5分も過ぎてない。それに彼女たちの座っている位置からして、カッとなってとっさに黒板消しを投げつけられるほど、黒板は近くない。
たぶん初めから、私が入って来たら投げつけようと思って持っていたんだろうな。つくづく、バカみたいなとこばかりに用意周到というか、凝ってるというか……。
「……何よ、その顔は」
黒板消しを投げつけた時は、文句を言っている割には全然怒っていない、鼻の穴を膨らませた得意げな顔だったのに、私が黒板消しをぶつけられても泣きも謝りもしないで冷めた目で見るっていう反応が気に入らなかったのか、樹里は少し顔を赤くして睨み付けてきた。
その眼力は「彼女」のような気の弱い子や、あなたの社宅に住む、あなたの父親より下の役職が父親である人達には逆らえないほど恐ろしいものかもしれない。
けど、私は卑怯者で度胸もないけど気自体は弱くないつもりだし、何よりあなたの父親の威光は私には何の関係もない。
だから、あなたのお気に召す反応なんてしてやるもんか。
「鞄を返して」
セーラー服を叩いて少しでもチョークの粉を落としながら私が言うと、思った通り樹里は「私に指図すんな!!」とヒステリックに叫んで、持っていてスタンドミラーを投げつけられた。
今度は予測していたのでひょいっと横に避けるけど、それも気に入らないのか「何、避けてるのよ!!」と理不尽すぎることを言い出す。
「落ち着いてよ、樹里」
美紀がそう言って宥めるけど、これは私はもちろん樹里のことを思っての言葉なんかじゃない。このままヒステリーが続けば、この暴君の理不尽は自分にまで飛び火してくることを知っているから止め

ているだけであることを、私もよく知っているよ。
そして、幼馴染なだけあって美紀は樹里がお気に召すのはどんなことかよくわかってる。
「良いじゃない。返してあげましょうよ……って、あら？　1、2、3……あらあらどうしてかしら？　鞄が一つ足りないわ」
「！　あーそういえば、結花（ゆか）がさっき、トイレに行ってたわねー。もしかして鞄を間違えて持って行ったのかしら？」
わざとらしく美紀がマスコットをジャラジャラつけた自分たちの鞄に視線をやって数えて、私のカバンがないことを指定したら、樹里も私がいない間に行っていた嫌がらせを思い出して、ニヤニヤとした笑顔でやっぱりわざとらしく言う。
間違えて？　どうせ鞄の中身か、もしくは鞄丸ごと便器の中に突っ込んでいるんでしょう？
しかもそれすらも、「トイレなんて汚いから」ってことで、あなた達のグループの中でカースト最下層の結花さんに無理やりやらせているんじゃない。
まぁ、いいや。別にこれは想定内。
むしろ鞄を人質ならず物質に取られてまだバカなことを言われるよりマシ。
そう思って私は身を翻して、教室から出て行こうと思ったら、「何、勝手に出て行こうとしてんのよ！」と怒鳴られ、今度はリップクリームが投げつけられた。
背を向けていたのでそれは頭に命中したけど、物が物なのであまり痛くなかったのが幸い。さっきと投げつけられるものの順番が逆じゃなくて良かった。
一応リップを拾って「何？」と投げ返しながら尋ねると、樹里は苛立ったように顔を歪めてリップを受け取りもせずにまたヒステリックに叫ぶ。
「あんたを何で、あいつの家にまで行かせたのか忘れたの？　さっさとよこしなさいよ！」
うん、ごめん。素で忘れてたわ。っていうか、これを忘れたら何で

私はこいつらの言うことを聞いているのかわからなくなるけど、本当に素で忘れてた。
それぐらい、私にとって「これ」自体はどうでもいいものだった。
だから私は、ポケットから取り出したピンク色のお守り袋をリップと同じように樹里に向かって放り投げる。
本当はびくびくしながら媚びへつらった顔で献上した方が色んな意味で良いんだろうけど、それだけはしたくなかった。
……やっぱり、私は最低だ。優先するのは自分のことばかり。
「彼女」の事なんて、私の自業自得な罪悪感を薄める言い訳でしかない。
そんな自己嫌悪で頭がいっぱいになって、後ろで樹里や美紀が怒っている声なんて聞こえていなかった。
なのに、私の罪悪感も自己嫌悪も教室の扉を開けた瞬間、はるか彼方まで吹っ飛んだ。
「――こんにちは」
「！　!?　こけっ！」
扉を開けたら極彩色の着物と隈取メイク、そしてその怪しさＭａｘさえも塗りつぶす顔面偏差値を持つ人がつっ立っており、私は驚きのあまりにとっさに後ろに飛びのいたけど足をもつれさせてそのまま後ろに倒れ込みそうになった。
「おっと……。ヒヨコ、鳩ときて次は鶏ですか……。その内、鴉にもなりそうですね」
けど、しりもちをついたり後頭部を床にぶつける前に、イケメンさんが手を伸ばして私の腰を掴んで抱き寄せてくれた。
その瞬間ものすごくドキッとしたけど、イケメンさんの発言で胸のときめきはただの羞恥に早変わり。
違う、違うの。あの「こけっ！」は悲鳴じゃなくて、転びそうだったから「こける！」って言いたかっただけなの。っていうか、私のとっさに上げる声に鳥シリーズを期待しないで。
「!?　だ、誰よ、あんた！」
私が心の中で言い訳をまくしたててていたら、樹里が声を上げる。ず

いぶん反応が遅いなとは思ったけど、無理もない。
ただでさえ中学校どころは秋葉原とかでも見かけるかどうか怪しいレベルに奇抜な格好している人が現れるだけでも一瞬思考がフリーズするのに、その恰好がどうでもよくなるくらいに綺麗な人をなんだもん。
むしろ樹里は、意外と危機感がある方だなと感心した。美紀なんて、未だに不審者だと認識せずにうっとりした顔でイケメンさんをガン見してるし。
まぁ、私も人のこと言えませんけど！
っていうか、いい加減離してくれませんかね！　この顔面が間近にあるって心臓に悪いんですけど、エルフ耳のおにーさん!!
「あの、大丈夫ですからそろそろ離してください！」
「おっと……。こいつは、失礼」
私の腰を抱き寄せ続けていることに今気づいたと言わんばかりにイケメンさんは白々しく言ってやっと離してくれたので、私はちょっと距離を取ってからまずはお礼を言って頭を下げる。
「えっと、転びそうな所を助けてくれてありがとうございます」
言ってから思ったけど、私が転びそうになったの、この人の所為だよね？　私、お礼を言う必要あったのかな？
そんなことを思いつつも、まぁ助けてくれたのは事実だしと自分に納得させていた私に樹里が怒声を浴びせる。
「礼を言ってる場合!?
どう見ても不審者相手に、何を呑気に礼を言ってるのよこのグズ!!」
うん、これは癪だけど樹里が正論だわ。何でこの人、中学校に入り込んでるの？
「いいじゃない、樹里。
ねぇ、おにーさんどうしたの？　どこのどなた？　私たちになんか用？　変わった格好だけど、もしかしてなんかの撮影？　モデルさん？」
けれど美紀の方はイケメンに悪人はいないとでも思ってるのか、樹

里を宥めてからこっちに駆け寄ってイケメンさんに話しかける。
　樹里の方も美紀に宥められたら大人しく黙ったってことは、本心から警戒してたと言うよりイケメンさんに抱き寄せられた私に嫉妬して怒鳴っただけだな、これは。
　現に彼女も「不審者」と言ってたイケメンさんの側に寄って来て、ちょっと赤い顔でチラチラとイケメンさんに視線をやってる。
　なんか、全部がバカらしくなってきた。
　この上なく怪しい人だし、初対面で結構意地悪なことばかりされてる気がするけど、転びそうな所をとっさに助けてくれたってことは悪い人ではないと思うから、もうこのまま私は二人をイケメンさんに押し付けて鞄を回収して帰ろうかな。
　そう思いながら、イケメンさんの脇をこっそり抜けようとしていたら、イケメンさんは相変わらず独特の間がある口調で美紀の問いに答えた。
「……ただの、薬売りですよ」
『薬……売り？』
　けど出て行く前に思わず私は、樹里や美紀とハモってそのイケメンさんの自称をオウム返し。
　薬売りって……薬剤師さんってこと？　それとも置き薬屋さんってこと？
　どっちにしろあんたみたいな薬売りがいるか！　正直、薬売り以前に人間かどうかも怪しいぞエルフ耳！
　しかしイケメンさんこと薬売りさんは、私たちが自分の返答でポッカーンとしていることなんか気にもかけず、淡々と勝手に語る。
「あなた方に用は……あります。ちょっと……話を、聞かせてやくれませんかね？」
　さすがに訳の分からない格好で、その恰好にまったく合わない、って言うか現代に存在するの？　な職業を名乗られた事で樹里は、「イケメンとお近づきになりたい」という気持ちより警戒心が上回ったのか、美紀の後ろからこそこそ私の後ろに移動して来た。私を盾にする気しかないな。

けれど美紀の方は薬売りさんの返答に引きつつも、未だに「えー、何ですかー？　おにーさんが売ってる薬なら、苦くてもちゃんと飲めそー！」と積極的に話しかけている。

そんなにイケメンとお近づきになりたいか。その行動力はある意味すごいなと私は感心していたけど、美紀さえも黙り込む爆弾を薬売りさんは淡々と放り込む。

「――――『首吊り』に、心当たりは、ありませんかね？」

その問いによって、教室内に沈黙が落ちる。

誰も、何も答えられなかった。

首が絞められたように、呼吸さえも一瞬できなかったのは私だけか。３人共か。

ぎしりと、何か重いものがきしんで揺れるような音がしたのは気のせいかどうかすらも、私にはわからない。

くびれ鬼：二の幕

「な、何よ、あんた！
首吊りとかいきなり気持ち悪いこと言って！　先生と警察呼ぶわよ変質者!!」
数秒だったのか、数分だったのかもわからないけど体感ではとてつもなく長かった沈黙を破ったのは、樹里のヒステリックな怒声。
言っていること自体は威勢がいいけど、樹里は私の後ろでしかも私のセーラー服の襟をつかんで引き寄せてで叫んでる。
私に縋りついているのならまだ可愛げがあるけど、これは完全に私を盾にしてる。
もしもこの薬売りさんが襲い掛かって来たら、私を突き飛ばしてぶつけて自分一人で逃げるつもりなんだろうな。
「……そ、そうですよー。へ、変なこと訊かないでくださいよー」
美紀の方は未だに薬売りさんに対して友好的な対応を取るけど、さっきまで薬売りさんの腕に抱き着いてみたりしてたのに、今はジリジリと後ずさって薬売りさんから距離を取っている。
けどこれは、いきなり脈絡もなく物騒なことを言われたから警戒している訳じゃない。
美紀も、樹里も、年頃の女の子としての警戒心なんて上っ面だけだ。
二人が薬売りさんの問いに対して懐いているのは、「恐怖」だ。
それも、変なことを聞かれた不審者に対する恐怖じゃない。
図星を突かれて、これ以上「真相」を暴かれたくないという自己保身からの恐怖で樹里は虚勢を張って、美紀はへらへら笑って誤魔化そうとしている。
「……そう、ですか。お二人は、何も知らないと……」
女子中学生のこんな誤魔化し、子供にだって通じない。
だから薬売りさんもわかっているはずだろうに、それでも彼はひとまず二人に「嘘をつくな」と言って問い詰めることなく、受け入れて横に置く。
上唇だけ紫色に染まっている口角は、わずかに上がっていた。

私達を見て薄く、酷薄に笑いながら薬売りさんは私に視線を向けて問う。
「では、あなたは？」
私の後ろで樹里は、「知らないって言ってるでしょ！　さっさと出て行きなさいよ!!」と薬売りさんを怒鳴りつけながら、襟をさらに強く引っ張って私の首を緩く圧迫する。
それは「何もしゃべるな」という命令と脅しであることは、わかってる。
だからこそ、きけない。
「……ある」
息苦しくても、私が最低な卑怯者であっても、これだけは嘘をつけない。言わなくてはいけないことだから、言った。
樹里がさらに強く、もう薬売りさんには見えないようにという上っ面さえも捨てて襟を引っ張って私の首を絞める。美紀は、薬売りさんの後ろで私を睨み付けている。
薬売りさんは、何もしない。
「……ほう」
ただ私の答えを聞いて、薄く笑ったまま相槌を打つだけ。
同級生に後ろから首を絞められている状態の私を助けようとはしない。
それを、薄情だとは思わなかった。私に助けてもらう資格なんてないことは知っていたから、むしろちょっとホッとしたくらい。
「あ、あの、おにーさん！　その子の言うこと信じちゃダメよ！　その子、嘘つきで八方美人のチクリ魔で有名なんだから！」
美紀が必死で私の言葉なんか信用ならないと訴えかけるけど、そんなの仮に真実だとしてもこのタイミングでそんなことは言えば言うほど、必至で主張している側の方が疑わしいというのをわかってないみたい。
もちろん薬売りさんは美紀の言葉をガン無視して、首を絞められている私の現状すらも無視して薄く笑ったまま「教えて、いただけますか？」と頼み込む。

私の答えは、決まっていた。
「それを知って……あなたは……どうする気？」
呼吸よりも優先して私が吐き出した言葉は、「首吊り」の心当たりではなく薬売りさんの「目的」を問う言葉。
言えない。
私の名誉とかそういうのはどうでもいいけど、「彼女」の名誉や尊厳の為に、よく知らない人に何の目的かもわからないまま「心当たり」を話すわけにはいかない。
ただの興味本位で、「彼女」のことを知ろうと思うな。
マスコミに売る為なら、もってのほか。
私の知る数少ない「彼女」の真実が、良いように誇張・歪曲されて真実からかけ離れた挙句、「彼女」の尊厳が踏みにじられるかもしれないのなら、絶対に言わない。
樹里の為でも美紀の為でも、そして「彼女」の為でもないけど、絶対に言わないよ。
これ以上、私は「あなた」のことを何も知らなかったと思い知りたくないから言わないだけ。
そんな身勝手な理由だけど、それでも私にとっては譲れない、引けない大事なものだから……。
ここで縊り殺されたって、言うもんか。
私が話すとしたら、「彼女」を――
「モノノ怪（け）を――斬るんですよ」
薬売りさんは、答えた。
自分の目的を。
「首吊り」の心当たりを知りたがる理由を。
心当たりが必要な目的を、端的に。
答えると同時に、彼の背負う箱の中から「カチン」と何かが鳴る音がした。
聞き覚えがある、音だった。

＊　＊　＊

「モノノ……怪(け)？」

オウム返しで問い返すと同時に、グイッと後ろにまた強く締められて私は息苦しさでえずいた。

「あんた、マジで頭おかしいんじゃない!?　美紀！　ケーサツ呼んでよケーサツ！　スマホ持ってるでしょ!?」

ついには私の首に腕を回してほとんど私を人質に取ってる銀行強盗みたいな体勢で樹里は叫んで、美紀に命令する。

美紀もさすがに「モノノ怪を切る」という発言で、「この人ヤバい！」と本気で思ったのかポケットからスマホを出して１１０に通報しようとする。

けれど、ここが中学校ではなく変わった格好が珍しくない秋葉原あたりでも職質されかねないぐらい怪しさしかないというのに、薬売りさんは全く動じない。

それどころか、芝居かかった仕草で腕を組み、顎を指先で撫でながら小首を傾げて彼は無視していた樹里と美紀に対して言った。

「おや？　気付いて……ないのですか？」

「な、何がよ!?」

反射的に噛みつくように問い返す樹里に、相変わらず酷薄に笑いながら薬売りさんは指さす。

警戒しながら樹里も、パニくってるのかガチガチ震えながらスマホを操作してた美紀も、そして私もその指が指す方向に目を向ける。

そして、見た。

その嫋やかな女の人みたいな手が指さしたのは、教室の窓――――

そこにぶら下がる、いくつものいくつもの先が輪っかになった縄を首吊りの為の縄を、見た。

「「きゃあああああぁぁぁぁぁぁっっっ!!」」

樹里と美紀が同時に悲鳴を上げる。

樹里は恐怖とパニックのあまりに私の首をさらに締め上げ、美紀は

スマホを床に落として自分も床に座り込む。たぶん腰が抜けたんだろう。
教室の窓の外なんて意識してちゃんと見ることなんかめったにないけど、間違いなくこんなものは昼間はもちろん、私が「彼女」の家に向かう前もなかった。あればさすがに生徒か先生、近隣住民の誰でもいいから誰かが気付く。
なら、いつ？　一体いつから、こんなものがぶら下がってるの？
誰がこんなものを、私たちに見せつけるようにぶら下げたの？
……「あなた」なの？
「あなた」が、したの？
「な、何よこれ!?　あ、あんたがやったの!?　嫌がらせ!?　キモイのよ変質者!!」
私の悲鳴も、問いたい言葉も樹里に締め上げられてる所為で何も出てこない。
私の首に腕を回したまま離さない樹里が、薬売りさんに罵声まじりで問い詰めるけど、その声は半分以上すでに泣いている。
けれど薬売りさんは樹里のヒステリーはもちろん、窓の外の不気味すぎる縄を見てもやっぱり全く動じた様子もなく、笑いながら言葉を続ける。
「最初から、ぶらさがっていました、よ。あなた方が、見てみぬふりを、していただけ」
その答えに、私たちは黙り込む。
……この人、何が訊きたいの？
「首吊り」の心当たりなんて、私たちに訊かなくても本当は何もかも全部、もうわかってんじゃないの？
そう思うほどに、その言葉は私達の胸に突き刺さった。
全部、図星。
私達は皆、見てみぬふりをしてる。
自分が背負うべき「罪」から逃げている、卑怯者だ。
「ふ、ふざけんじゃないわよ！　美紀！　まだなの!?　早くケーサツ呼んでよ!!」

樹里は突き付けられても、まだ虚勢を張って、見てみぬフリをして、なかったことにしている。
「罪」を突き付ける薬売りさんもこの場から消して、なかったことにしようとしている。なかったことにできると思ってる。
その為に警察を呼べと美紀に怒鳴りつけるけど、美紀は床に座り込んだままは涙目で、真っ青な顔色で、ガタガタ震えながらスマホの画面を私達に見せて訴えた。
「じゅ……樹里……。さっきから、スマホが変なの！　アンテナも立ってるし、バッテリーも残ってるのに電話もラインも通じない！　っていうか画面が、ラインの画面が!!」
「はぁっ!?　もういいわよグズ!!」
私を盾にしながら引きずるように連れて、美紀の元までやって来た樹里は美紀からスマホを奪って、座り込む美紀を蹴りつけた。
そして、奪ったスマホを見て絶句。私も画面を見て、言葉を失った。
スマホの画面は、ラインのトーク画面。
ポン、ポンと軽快な音を立てて次々にメッセージを受信してるけど、その宛名は文字化けしていて読めない。それだけでも十分不気味なのに、受信してるメッセージは全部同じたったの一言。
『死のうよ』
死ぬことを誘う言葉だけが1秒ごとに送られ続ける。
トーク画面は全部「死のうよ」で埋まってる。
そして画面をいくらタッチしようがスライドしようが、画面は切り替わらない。ホームボタンや電源も同じ。何度押しても一旦電源を切ってしまおうと長押ししてみても、画面は死を誘うトーク画面から変わらない。
「何よこれ!?　何なのよこれ!?」
美紀のスマホを樹里は壁に向かって叩き付けてから、自分のスマホをポケットから出す。
彼女のスマホは、ラインを受信してなかった。そのことに少しだけホッとしたのか、ガタガタ震えて操作がおぼつかなかった指先が少しはマシになる。

けれど、樹里の安寧は一瞬でまた恐怖に叩き落とされた。彼女のスマホが操作できたのなんて、上げて落とす為の前振りでしかなかったんだろう。
電話で１１０を押して通話にしたら、２コールほどで繋がったのが未だに樹里に抱えられている状態の私には聞こえてきた。
「もしもし！　ケーサツ!?　助けて変質者が……」
《――――――許サナイ》
ノイズと音割れが酷くてすごく聞き取りにくいけど、確かに聞こえたんだ。
「!?」
《許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ……
――――――死ネ》
「!!??　きゃあああああああああああああっっっっっ!!」
樹里が私を抱えたまま、首を絞めたまま絶叫を上げる。
至近距離からの甲高い声は普段なら耳が痛いくらいだっただろうけど、今の私にはその声は酷く遠かった。
樹里の悲鳴なんかよりも、私の耳に残った声は、電話からの声。

それは確かに、「彼女」の声だった。

＊　＊　＊

「ここは、とうにモノノ怪の縄張り、なんですよ」
自分のスマホを床に叩きつけるだけではなく、もう二度とあの声が聞こえないようにする為か執拗に足で踏みつけて、粉砕しようとしている樹里を無視して薬売りさんは背負っていた箱を下ろして語る。
「おかしいと、思いませんか？
何故、私が誰にも咎められず、中学校校舎に入り込めたのか……。
何故、もう日が沈んでいるというのに、誰もあなた方に、早く帰るように注意する者が、現れないのか……」
そこまで言われて、本当に今更ながら現状はおかしすぎることに気

付く。
そうだ。こんな目立つ人が誰にも気づかれず、校内に入り込めたことがまずおかしい。
まだ下校時刻を過ぎた訳じゃないから、部外者が校内に入り込む隙はあったかもしれない。だから、たまたま誰にも見つからずここまでこれたのはいいとしよう。
でも、冬なので日が落ちるのが早くなってるこの時期じゃ、まだ5時ちょっと過ぎでも日が落ちてしまったのなら先生が教室内を見回って、補修や部活動以外で残ってる生徒は帰るように注意するはずだ。
なのに……何で未だに誰も来ないの？
それだって、まだ偶然の範疇かもしれない。けど、けど……明らかにおかしい部分に私は気付いてしまった。
「……結花……さん……は？」
もうこの時点では悪意によるわざとではなく、ただ単にパニックになってるだけだろうけど、かろうじて呼吸が出来る程度にまで首を絞められた状態の私が問う。
忘れてた。けど、思い出した。ここには本来、もう一人いるはずだったことを。
私の鞄を、樹里と美紀の指示で便器の中に落とせとか言われているはずの結花さんが未だに教室に帰ってこない。
彼女の鞄はこの教室内にあるから、もうすでに帰った可能性は低い。そもそも、そんなことができる人なら樹里たちの横暴に唯々諾々と従いはしない。
私の問いで樹里と美紀もようやく結花さんのことを思い出したのか、一瞬きょとんとしてから血の気が引いた。
この状況で一人逃げたとか、あのラインや電話は彼女の悪戯だという可能性よりも、もっともっと最悪の可能性が二人の頭にも真っ先に浮かんだんだろう。
「……おや。もう一人、いたんですか」
薬売りさんだけが最初と変わらないテンションで呟き、タンスみた

いな箱の下から二段目の引き出しを開ける。
　するとそこから、虫みたいなものが無数に飛び出して来て教室の床、机と机の間に等間隔で整列する。
「ひぃっ!!」
「な、何よこれ!?　何なのよこれは!!」
　美紀が腰を抜かしたまま縮こまり、樹里は相変わらず私を抱え込んだまま足元の「何か」が自分に近づかないよりに蹴りつける。
「……あ」
　樹里が蹴りつけたものが鈴(リン)っ！　と音を立てて舞い上がって、私の肩に乗ってようやく私はそれが何なのかを理解した。
「……どうやら、あなたのことを、気に入ったようだ」
　それは、私が拾った硝子細工の蝶か蛾っぽいやじろべえ（仮）だった。
　そのやじろべえ(仮)は、私の肩の上で一度お礼でも言うように、頭を下げるしぐさのように前に傾いたかと思ったら床に降り立ち、他のと同じように整列してそのまま動かない。
「な、何これ!?　虫なの!?　硝子なの!?　何で勝手に動くのよ!!」
「天秤も、見た事がないのか?」
　生き物のように動いたかと思ったら、絶妙なバランスで床に立ってそのまま動かなくなった「それ」に、樹里がまたさらに怯えた声を上げる。それでも私を離さないのは何で?　樹里は本気で何がしたいの?
　そんなことをどっか現実逃避気味に私が思っていたら、樹里のヒステリーとパニックに薬売りさんが淡々と突っ込む。
　天秤?　これ、天秤なの?
　まぁ、確かに言われてみればそう見えないこともないかもしれない。
「て、天秤?　なんで、こんなとこで天秤なんか……。なんで、天秤が動いて……何の重さを……?」
　天秤から逃げるように、教卓にしがみついて美紀は半泣きで薬売りさんに問う。

うん、確かにそっちを先に突っ込むべきだったな。だめだ、私も樹里のこと言えないくらいにパニくってるのかもしれない。
「これは、重さではなく、距離を測る天秤だ。……天秤の傾きが、モノノ怪との位置を、教えてくれるんです」
けれど一番冷静なような顔で、実は一番パニくってるんじゃないかな？　と思うようなことを薬売りさんは言い出す。
もはや窓の外の縄やスマホの異変、そして勝手に引き出しから飛び出して机と机の間に均一に自分から整列する硝子細工の天秤を見たら、「モノノ怪」自体を否定する気はないけど、何で天秤で距離を測るの？
けど私たちの疑問なんて気付いていないのか答える気がサラサラないのか、薬売りさんは床に整列した天秤を見下ろしながら、何かを指示するように指を動かして勝手に語る。
「……もう一人、いるとは、思わなかった。
無関係なら、弾かれただけだろうが、関係者なら……もう、遅い」
言うと同時に、天秤が全部一斉に同じ方向に傾いて鈴が激しく鈴っ!!　と鳴る。
そして鈴の音とほぼ同時に、薬売りさんも動いていた。
薙ぎ払うような動作で何かを、天秤が傾いた方向、いくつもの縄がぶら下がっている窓の方に投げつける。
魔っ魔っ魔っ魔っと音を立てながら窓一面に貼り付いたのは、短冊のような長方形の真っ白い紙かと思ったら、貼り付いた瞬間に赤黒い模様か文字かよくわからないものと、眼らしき模様が浮かび上がってお札らしいお札になる。
眼らしき模様は、初めは幅の狭い平行線だったのに一瞬の間を開けてから開眼したので全員が短い悲鳴を上げた。
けど、私たちは窓の外にぶら下がるものに気付いて、お札に浮かび上がって開いた眼に対する驚きや恐怖なんか一瞬で上塗りされた。
「「ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁっっ!!」」
樹里と美紀が、喉が避けるのではないかと思うほどの悲鳴を、恐怖

そのものの声を上げる。
お札の隙間から見える、窓の外にぶら下がる縄。
先端が輪っかになっている……どう見ても首吊り自殺の為の縄。
その内の一つに……、人がぶら下がっている。
眼球が半分飛び出しているんじゃないかと思うくらい、両目は見開かれている。
口から血の気を失って青っぽくなった舌がデロリとはみ出ていること、首には縄を外そうともがいたであろう生々しいひっかき傷、指先は自分の血と肉片がこびりついていることが、どれほど苦しかったかを物語っている。
樹里たちと同じくらい外見に気を使っていたのに、今は見る影もない。それでも、それが誰なのかわかりたくないけどわかった。
薬売りさんの言う通り、ここはとうにモノノ怪の縄張りで、もう遅かった。
窓の外にぶら下がっている首吊りは、私の鞄をトイレに持って行ったはずの結花さんだった。
……これだけでも夢なら覚めて欲しい、現実ならいっそ気を失ってしまいたいくらい悪夢的な光景だけど、樹里と美紀が絶叫した理由は、私が樹里の腕なんて生易しいくらいの息苦しさで言葉を失っている理由は、悪いけど結花さんの死体じゃない。
『――――許サナイ』
私達にとって、怖いもの。
『死ノウヨ』
「首吊り」の心当たり。
モノノ怪の正体なんて、私たちは最初からわかってた。
『死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ』
それは、首を吊って窓の外でぶら下がる結花さんの背中にしがみついている。
縄が食い込んでいる結花さんの首を、それでもまだ生ぬるいと言わんばかりに背後からしがみついて、両手で首を絞め続けている。

『死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ死ノウヨ』

血走った目で、私たちを見ながら死に誘う。

ニタニタと悪意そのものの笑顔は、結花さんの死に顔以上に生前の面影なんてない。

『　死　ネ　』

けれど、わかってしまう。わかりたくなんかない、信じたくなんてないけれど、それが誰かわかってしまった。

「……いつき……さん」

それは間違いなく、１０日前に自宅で首つり自殺した私たちの同級生。

鳥居　いつきさんだった。

いつきさんだった。間違いなく、「彼女」だった。

「遅かったが……『形』はわかった」

だけど、薬売りさんは「彼女」を違う名前で呼ぶ。

「モノノ怪の『形』は――――『くびれ鬼』」

もう、人ではないと。

それを肯定するように、証明するように、カチンと何かが鳴る。

薬売りさんがいつの間にか手にしている「剣」から聞こえた。

くびれ鬼・三の幕

薬売りさんはいつの間にか箱の一番上、最上段は引き出しではなくそこだけ独立している箱の蓋を開けて取り出したものを構えていた。
それはたぶん、刀か剣だと思われるもの。
長さはせいぜい５０センチくらいで、さほど大きくなく。
青系統の配色でまとまっているこの人にはちょっと不釣り合いに見える金と赤が基調で、宝石なのか硝子なのかは私には判別つかないけど、この人の持ち物らしく派手な装飾が柄にも鞘にも施されている。
そして、柄と思わしき部分の先には赤鬼にも白い毛の猿にも見える頭がついていた。
私は、確かに見た。
薬売りさんが「彼女」を「くびれ鬼」と言った時、口を大きく開いていたはずの頭が勢いよく口を閉ざして、その歯が「カチン」と硬く澄んだ音を立てたのを。
私が聞いた、聞き覚えのある音はあの剣の音であることをようやく知った。
「く、くびれ鬼？　それが、あのお化けの正体なの？」
樹里が薬売りさんの言葉に反応して問い返す。
その声には少しだけ安堵が見て取れた。
現状、窓の外に同級生の死体とその死体にしがみついて死に誘う幽霊みたいなのがいるこの状況で、懐くはずがない感情。
それは、明らかに妖怪っぽい名前を口にした薬売りさんが「気付いてない」と思っているからこそ懐いたもの。
あれは妖怪なんかじゃない。
間違いなく１０日前まで私たちと同じ、中学２年生の女の子だったことに気付いていない、最初からそういう妖怪だったと思ってくれていることに樹里は、そして美紀も安堵している。
自分たちが「彼女」にしたことを、なかったことに出来ることを喜んでいる。

けれど、そんな甘い考えは通用しない。
私が樹里の腕を引きはがして、薬売りさんに「違う!!」と訴えかける前に、薬売りさんは窓の外の首吊りと「彼女」に剣を構えたまま、やっぱり淡々と答える。
「……正体、ではなく、『形』ですよ。
そして、モノノ怪の形を成すのは、人の因果と、縁」
「彼女」を、「もう人ではない」という証明のように別の名前で呼んだ。
けれど、あれは「彼女」の「正体」ではないと言ってくれた。
「彼女」があんな「形」になってしまった、理由(わけ)があると言った。
「――よって、皆々様の『真(まこと)』と『理(ことわり)』を、お聞かせ願いたく候(そうろう)」
私達に向き直った薬売りさんは剣を見せつけるように構えて、凛と高らかに宣言した。
＊　＊　＊
「ま、真と理って何よ!?」
「く、薬売りさんはあれを、あのお化けを切りに来たんでしょ!?
その剣で切るんじゃないの!?　なら早く切っちゃってよ!!」
樹里が問い返し、美紀はもう泣きながら薬売りさんに早く切ってと懇願する。
けれど薬売りさんは樹里の問いは黙殺して、美紀の懇願には即座に言葉で切り捨てた。
「無理、ですね」
「何で!?　どうして!?」
「この剣は、『形』と、『真』と、『理』が揃わないと、抜けないのですよ」
「だから、その真と理は何だって訊いてるんでしょうが!!」
薬売りさんの「無理」に美紀は絶叫で問い返すけど、それでもこの人は飄々としつつ淡白な調子を崩さない。
樹里に再び怒鳴られて問われても、剣の頭に話しかけるように眺めたまま視線も向けなかった。

それでも、さすがに「真」と「理」に関しての説明はしてくれた。
「『真』とは、事の在り様。『理』とは、心の在り様。
人の縁と、因果を廻って、モノノ怪を為す。何かが有り、何者かが、何故にか、怒り、憎み、恐れ、欲し、望んでいる。
それを、明らかにしない限り、剣には力が宿らず、モノノ怪は斬れん、ということですよ。
だから……お聞きしたい。
あのモノノ怪。『くびれ鬼』と成り果てた――『いつきさん』という方の、『真』と『理』を」
薬売りさんの説明を樹里は「意味わかんない！」と噛みつき続け、美紀は教卓にしがみついたままただ怯えて泣き続けてどっちもろくに話を聞いていなかったけど、「いつきさん」という名前には反応して一瞬黙る。
そっか……。薬売りさんはちゃんと聞いて、そして覚えていてくれてたんだ。
私が「彼女」を見て呟いた名前を。
樹里や美紀の安堵と同じくらい場違いなのはわかってるけど、それが私にとっては嬉しかったから少しだけ無意識に笑ったんだろうね。
私の首に腕を回している樹里の力が強まって、一瞬だけど完全に息を止められた。
それはただ単に私が笑ったことが気に入らなかったのと、私が余計なことを言わないようにという脅しだったんだろうけど、樹里が首を絞めてまで「何もしゃべるな」と脅すべきだったのは、私一人じゃなかった。
「あ……あああああぁぁぁぁぁぁっっ!!
ち、違う!!　違うもん!!　私は悪くない！　私の所為じゃない！
やだ、いやだ！　いやあああぁぁぁぁっっ!!
お願い助けて薬売りさん！　違うの！　私は悪くないの!!　私は樹里に！　あいつに言われてやらされていただけで鳥居さんのことを本当はイジメたくなかったの!!」
抜けていた腰は一体いつ復活したのか、美紀は天秤を蹴り飛ばして

なぎ倒して薬売りさんに駆け寄り、しがみついて主張する。
今はもう、初めのような下心はなく本気で助けて欲しいから縋り付いているのだろう。なりふり構わず、涙どころか鼻水もダラダラ垂れ流し、化粧が落ちてドロドロの顔で彼女は言い張る。
「彼女」を……いつきさんをいじめていたのは、自分の意思ではないと。
自分の意思じゃない？
樹里がいつきさんを下着姿で更衣室から閉め出して泣かせていた時、お前は何をした!?
お前はわざわざ男子を呼び出して、いつきさんを晒しものにしてただろうが！
いつきさんが喘息やてんかんの発作を起こした時、お前は何をしてた!?
樹里と一緒に笑いながら、苦しんでいる彼女をスマホで撮影した挙句にＳＮＳで拡散したのは自分の意思じゃなかったって言うのか!?
結花さんが言うならまだしも、お前が言うか!?
あの人も弁護のしようがないことばかりしてきたけど、お前達の命令がない限りは自分から何もしない人だった。
自分がいじめる側に回らないと、自分がいつきさんの立ち位置になるとわかっているからやっている卑怯者だったけど、少なくともあの人はいつきさんをいじめて泣かせている時、お前達と一緒に嗤いつつも眼は嗤っていなかった。
卑屈そうに自己弁護の言い訳ばかりでも、それでも誰かが傷ついて泣いているのを見て楽しめる人ではなかったのは確かなのに……それなのに……お前は！　お前は!!
「……ほう」
薬売りさんは美紀の狂態に引いた様子も見せず、ドロドロで汚い顔を嫌って押しのけもしなかったけど、彼女の言葉を信じて同情している様子もない。
むしろどこか面白がっているような薄い笑顔で、相槌を打つ。
「！　美紀！　あんた何を……」

「あいつよ！　あいつに命令されて、やりたくなかったのに無理やりやらされてたの!!」
樹里は美紀の光速の裏切りに一瞬呆気に取られたのか、ちょっと間が開いてから叫ぶけど、美紀はその声に被せるように主張する。
「あいつが！　安藤君が鳥居さんのこと好きだからって、鳥居さんさえいなくなればってバカなこと言い出して……、でも、何しても鳥居さんは学校を休まなかったから！　だからエスカレートしちゃったの！
私は悪くない！　死んじゃえとか死ねばいいのになんて思ってなかったもん！　あいつが、樹里が、喘息なのに無理やり走らせたり、階段から突き落としたりしたのは、鳥居さんを殺そうとしてたのは樹里で私じゃない!!
鳥居さんに死ねって、自殺してしまえなんて言ったのは私じゃない!!
だから、お願い助けて!!　死にたくない!!」
「美紀っっ!!　あんた――――」
美紀の暴露に樹里は顔を怒りと羞恥、そして歪んでいたとしてもたぶん本心から樹里は美紀を親友だと思っていたんでしょうね。
その親友の裏切りによる悲しみの声を上げるけど、言葉にならない。
だから、その隙に私が行動に移す。
樹里を擁護する気はない。けど、それはお前の言い分を見逃す理由にはならない。
初めからそうだったけど、美紀。お前は絶対に許さない!!
「お願い！　お願い!!　助けって痛っ!!」
私が樹里にしがみつかれたまま脱いだ上履きは、美紀の腰に命中する。
薬売りさんに当たるかもとか考えずに投げつけた勢いが良すぎて、黒いセーラー服でも靴の跡がうっすら見えるから結構痛かっただろうね。
しがみついていた薬売りさんから手を離して振り返り、涙と鼻水、

溶けた化粧でグチャグチャの顔で美紀は私を睨み付けるけど、私は樹里にまだ首を絞められたまま言う。
　これは邪魔しないだろうけど、このまま樹里に絞め殺されても絶対に言ってやるんだ。
「黙れ……。大ウソつき。
　……いつきさんの、喘息やてんかんの薬を盗んで、捨てたのは……お前だろ。……樹里に、褒められたって……自慢していたくせに……」
　何が、死んじゃえとか死ねばいいのにとか思ってない、だ。
　確かにお前はそこまで思ってなかったのかもしれない。
　でも、陰険で横暴な暴君だけどどっかちょっと抜けていて詰めの甘い樹里に代わって、自主的にその詰めの甘さのフォローをしていたお前は、いつきさんのことも、他の誰の事も全部みんな、自分が被害に遭いさえしなければ、「別に死んでもいいや」「死んだら面白いかも」ぐらいには思っていたんだろ！
　許さない。絶対に。
　自分のしたことの責任を、全部誰かに丸投げすることは絶対に許さない。
「な、何よ！　何、今更いい子ぶってるのよ偽善者!!」
　私の暴露に美紀は一瞬ひるんで、けれど即座に言い返す。
　わかり切っていることを、勝ち誇ったように歪んだ笑みを浮かべて叫んで言い返す。
「大ウソつきはあんたの方じゃない！
　鳥居の奴の友達ぶっておきながら、私や樹里に尻尾振って私たちの言うこと聞いていたくせに！
　今日だって、樹里の命令で鳥居の父親の形見のお守りを盗んで来たくせに!!」
　美紀が、私の隠すつもりも言い繕うつもりもなかった「罪」を叫び終わると同時に、鈴が鳴る。

天秤の、モノノ怪との距離を測り、位置を傾きで教えてくれる天秤が一斉にまた傾いた。
今度は窓の方とは逆側。教室の廊下側に。
『え？』
思わず私たちは一斉に声を上げ、そちらに視線を向ける。
薬売りさんは何も言わなかった。ただ少し、いつの間にか少しだけ横に移動して彼も視線を廊下側に向けると同時に、教室の戸が開いた。
そこから、大群の蛇のような縄が飛び出し、美紀の全身に絡みつく。
ううん。よく見ればそれは縄じゃなかった。
それは全部、腕。
ただ、骨が抜かれたようにグネグネと有り得ない箇所が有り得ない角度、方向に曲がる。
蛇のように、縄のように腕は美紀に絡みついてしがみつく。
病的に白くて細い腕。
右手首の少し大きなホクロ。
左掌の内側にある、丸い小さな火傷の痕。樹里たちがふざけて吸った煙草を押し付けられた痕。
見覚えのある手だった。

『　死　ネ　』

無数の両手は全部、いつきさんの手だった。
いつきさんの手が、廊下から溢れ出して美紀の首を、手足を、服を、髪を、全身を掴んで引きずって教室から廊下に連れ出す。
「!!??　ぎゃあああああああああああっっ!!!!
いやあぁぁぁぁ!!　助けて！　助けて!!　死にたくない!!　誰か！　たすけ……」
「美紀!!」

とっさに手を伸ばすけど、私の手は届かなかった。
何も考えていない反射なのか、それとももはや本能的に私を盾にしているつもりなのか、樹里がまた私の呼吸を止めるほど強くしがみついてきて振り払えず、ただ私は眼を見開いて絶叫して、もがきながら廊下に引きずり出される美紀を見送ってしまった。
美紀の全身が教室から出ると同時に、扉は勝手にピシャリと音を立てて閉まる。
廊下からは、もう何も聞こえない。
＊　＊　＊
閉じた扉を私と樹里、そして薬売りさんが見つめてしばし沈黙。
その沈黙を最初に破ったのは、薬売りさんだった。
「……おっと。……窓の外に気を取られて、廊下側に結界を張るのを、忘れておりました。
うっかり、うっかり」
いけしゃあしゃあの見本のように、薬売りさんは自分の頭を手で軽く叩きながら言う。
絶対にうっかりじゃない。表情はもちろん、顔色も自分のミスで一人犠牲が出たことに対して何一つ変わっていないし、何よりこの人、美紀が自分から手を離して私たちと向き直った時、地味に移動してちょっと横にずれてた。
この人の最初の立ち位置は、一番扉に近い。あそこじゃあの腕たちの巻き添えに自分も遭うことをわかっていたから、腕が扉から一直線に美紀に向かえるように移動したとしか、今は思えない。
だって、この人は美紀が消えても窓のようにお札を貼らない。「張り忘れてた」と言っていた結界を、張ろうとはしない。
また、廊下から腕や縄が私たちを縊り殺すために出てきてもいいと思っているようにしか見えなかった。
「あ……あんた……何なの!?　お化けを!　あれを切るんじゃなかったの!?」
樹里の方も、薬売りさんがわざと美紀を見捨てたとしか思えない事をしたと気付いて、私を抱えたままガタガタ震えて窓の外を、結花さ

んの首を絞めながらしがみついていたはずの「彼女」を指さす。
けれど、もうそこに「彼女」は……いつきさんはいない。
窓の外にぶら下がるのは、首吊りの輪と結花さんの首吊り。そしていつの間にか増えた、結花さんと同じようにもがき苦しんで窒息したと思える、けれど結花さんと違って全身に爪を立てられて握りしめ、捕まれた手形だらけの美紀の遺体だった。
増えた美紀の遺体に気付いて樹里は、「ひいいいっ!!」と悲鳴を上げて窓から離れようとするけど、薬売りさんや未だ天秤が傾いて「そこにいる」ことを表している廊下の近くにも行きたくなかったからか、結局は教室の真ん中に踏みとどまる。
「斬りますよ。
だが、その為に必要な『真』と、『理』を、話してくれなければ、この剣は、いつまでたっても抜けません、よ」
そんな樹里の醜態を嘲笑うように、最初からだけどもったいぶった口調で薬売りさんは言う。
真実を話せ、と。
けど、樹里は「ふざけるな!!」と怒鳴って往生際が悪くそれを拒否する。
ふざけるな？　それはこっちのセリフだ。
見てみぬフリをしてても、いつか必ず追いつかれて清算させられるものなんだ。いい加減、眼を逸らすのはやめろ。
「……美紀の……言ったことは……、彼女自身のこと以外は……全部、本当です……よ」
「！　黙れ！　黙りなさいよ!!」
私の言葉に、樹里は鼓膜が破けそうな程、樹里自身の喉も避けそうな声を張り上げて足掻く。
よっぽど頭に血が上っていたのか、私の首を絞めるのも腕ではなく手を使って直接的に締め上げ、私の口を塞ごうとしてきた時――
「――――いい加減、その人を離してやったら、どうですか？」
樹里の目の前に薬売りさんの剣が突き付けられて、鬼か猿の頭と目が合ったのか樹里は短く悲鳴を上げた。

それでもまだ私を離さず、むしろ私を振り回して盾にして樹里は「何すんのよ!?」と薬売りさんに文句をつけるんだけど、彼は樹里を無視して私を見下ろし、言った。
「……それにしても、先ほどの話。本当に、『私は何も悪くない』という主張以外、『本当』なんでしょうかね？」
質問の意味がよくわからず私が無言でいると、薬売りさんはそのまま言葉を、薬売りさん自身の感想を告げる。
「私には、『あなた』がいつきさんとやらを、いじめるようには、どうしても見えないのですが」
私を真っ直ぐ、真っ直ぐに見て言う。
酷薄な笑みは、もうその綺麗な顔に浮かんでない。
あまりに真摯な、真実を求める顔で私に彼は尋ねる。
「本当か？」、と。
その問いに、私が返せる答えは。
私が、返すべき答えは。
私の「真」は――――
「っっどいつもこいつも、こいつのいい子ぶりっこに騙されて、私に全部責任を押し付けるんじゃないわよ！
本当よ！　こいつはね！　陰気でノロマで勉強だけが取り柄のガリ勉な鳥居の唯一の友達のふりして一緒にいてやったけど、私が命令すれば何でもやったのよ！
鳥居のノートを破けと言ったら破ったし、財布からお金を取ってこいって言ったらやったし、今日だって！　あいつが赤ん坊の頃に死んだ父親の形見のお守りを盗んできなさいって言ったら、本当に盗んできたのよ！」
私が何かを、私にとってまぎれもない「真」を語る前に、樹里はもうヤケクソなのか私が何をしたのか、私に何をさせたのかを叫んで暴露して、そして見せつける。
私が投げ渡した、泥で薄汚れたピンク色お守り袋。
私が決して無罪なんかじゃない証を、薬売りさんに勝ち誇るように見せつけた。

なのに、薬売りさんの眼には私に対しての失望や侮蔑と言った感情は浮かばない。
何考えているかさっぱりわからない人だけど、そういった感情がないことだけは自惚れじゃなくてはっきりとわかった。
だって、この人は樹里が突き付けるお守り袋を見て、消えていたはずの薄い笑みを復活させて言ったから。
「……ほう。……赤子の時に死んだ、父親の形見のお守り……ですか。それにしては、そのお守り袋、妙に――――」
薬売りさんが気付いていることに気付いた私は、とっさにもがいてしがみつく樹里を振りほどこうとしながら、叫んだ。
「!! やめて!!」
けれど、私が「言わないで!!」と懇願する前に、樹里が行動に移す。
私を人質の様に抱え込んでしがみついていた樹里がいきなり、私を薬売りさんの方に思いっきり突き飛ばす。
「おっと」
薬売りさんは横に避けるのではなく、そのまま突き飛ばされた私を受け止めてくれた。
その隙に、彼が持っている剣を握る力が弱まったのを計算していたわけじゃないでしょうけど、樹里は見せつけていたお守りを投げ捨て、薬売りさんの剣を奪ってそのまま窓の方に向かって、剣で窓をたたき割ろうとする。
廊下に逃げなかったのは、そちらに「彼女」がいるからだろうけど、窓を割ってもここは3階だから飛び降りても死にはしないかもしれないけど、そのまま走って逃げられるほど軽症で済むとは思えない。
だから別に何も考えてなかった。ただひたすらにここから逃げ出したかっただけだろう。
その行動が、最大の悪手だと知らないまま。
全部が薬売りさんの掌の上だと知らないまま、樹里は踊る。
その踊りの伴奏のように、鈴が鳴った。
＊　＊　＊
鈴が鳴る。

天秤がまた、傾いた。
「え？」
薬売りさんから奪った剣で、びくともしない窓をガンガン叩いて割ろうとしていた樹里が、顔面を蒼白にさせて床を見る。
その視線は徐々に傾きが示す方向に向かって行き、どこに行きつくか気付いた時、彼女は剣を落としてそのまま壁に、窓に背中がぶつかっても距離を取ろうと足掻いた。
「あ、あ……。い、嫌！　嫌あああぁぁっっ！」
今度の天秤は、全部が一斉に同じ方向に傾いたわけじゃない。
一つ一つが微妙に角度が違う。
真上から見たら教室内のある机を中心に放射状の線になっているように、天秤は傾いて示す。
『――――許サナイ』
モノノ怪の位置を。
その傾きが示した机の上には、花が活けられた花瓶が乗っている。
『許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ……才前ハ、絶対ニ許サナイ!!』
……いつきさんの机の引き出しから、ずるりとそれは現れた。

『　死　ネ　』

蛇のように動く無数の両手が、教室の扉から出てきた時の様に溢れ出し、その腕たちは机をガタガタ揺らして花瓶を落としながらも一直線に、樹里に向かう。
「いやあああぁぁぁぁぁぁぁっっっ!!」
「やめて!!　やめて、いつきさん!!　ダメ!!」
美紀の時と同じように、樹里はいつきさんの腕に全身が捕まれ、今度は教室の扉から廊下ではなく、人が入れるはずのない引き出しの中に引きずり込まれる。
私がそれを阻止しようと、必死にもがいて抵抗して私たちに手を伸ばす、助けを求める樹里に私も手を伸ばすけれど、今度は薬売りさんに腰を掴まれたままだったせいで、また私の手は届かなかった。

「何で！　助けなさいよ!!　いや、いやああっっ！　助けて！　助けてよ！
嫌だ嫌だこんな死に方だけはいやあああああああああああああああっっっっっ!!!!!!」

私が手を伸ばした時、樹里の目は一瞬輝いたけど薬売りさんに邪魔されて樹里のもとに行けない私を見た彼女の顔は、憎悪で歪みきっていた。
けれど、体の一部が無理やり机の中に引きずり込まれているからかゴキっ！　とかボギっ！　という硬いものが折れる音に樹里自身が戦慄して、怯え切った絶叫をしながら結局、彼女はいつきさんの腕と一緒に机の中に消えてしまった。
全身の骨をあの机の中に入れる為に折って砕くものすごい音に怯えていたけど、痛み自体は感じていなかった様子が救いになるのかどうかはわからない。
ただ、私は樹里がいなくなって私と薬売りさんだけが残された教室の床に座り込み、ゆっくりと窓の外に視線を移す。
そこにぶら下がる体は、三つに増えていた。
結花さんと同じように苦しそうに、美紀と同じように全身手形だらけで、そして体中の骨が折られたせいか二人よりも全身がだらりとだらしなく重力に従って垂れさがっている樹里の遺体は、それ自体が一本の縄に見えた。

くびれ鬼：大詰め

「……なんで、邪魔したんですか？」
「……邪魔？」
薬売りさんは窓の外の樹里に見向きもせずに、剣を拾い上げて私の質問をオウム返ししてくる。
「むしろ……、あんたは何故、二人を助けようとした？」
私の質問の意図すらわかってなかったわけじゃない。むしろ理解しているからこその問いで返される。
けれど、あなたは勘違いしてる。私が助けたかったのは、美紀でも樹里でもない。
「二人を助けたかったんじゃない。
いつきさんがもうこれ以上、私達なんかの所為で人ではないものになって欲しくなかったから止めたかったんです」
やっと、私の言葉を阻むものはなくなったから、私はこの人に私の「真」を告げられる。
ねえ、薬売りさん。私は、あなたにいつきさんのことを話す気はなかったけど、今なら話してもいいって思ってるんだ。
あなたが、いつきさんを――救ってくれるのなら、話すよ。
「いつきさんはね、気は弱くておとなしいけど、本当に優しい人だったです。
どんな些細なことでも、『ありがとう』と『ごめんなさい』を忘れない。普段はすっごく人見知りなのに、困っている人を見かけたらいつも真っ先に声を掛けることができる人だったんですよ。病弱だから、自分の事で手一杯だったはずなのに……」
私が知っているいつきさんの事なんて、これくらい。私は、彼女の友達と名乗れるほど彼女のことを知らない。
知らないけど、これだけで十分だ。
いつきさんのことを、好きであることは。友達になりたかったという後悔には、十分すぎる。
「そんな彼女に、こんなことをさせるほど追い詰めた私達が怖い目に

遭って、苦しんで苦しんで苦しんで死ぬのは当たり前のことなんです。
私達は何も悪くなかった彼女を、気に入らないから、反応が面白いから、自分がいじめられたくないからという身勝手な理由で死に至らしめた人殺しなんだから、自分達の命でその罪を償うのは当然のことなんです。
……でも、私たちは死んで当然の最低な罪人だからこそ、いつきさんが手を汚す必要なんかなかった！　彼女が私たちと同じところにまで堕ちる必要なんかなかった!!
なのに……なのに……、私たちは彼女の尊くて綺麗な部分を、あそこまで悍ましいものに変質するほど、傷つけ、甚振り、追い詰めて、壊した……」
私達の方こそが、いつきさんを死に誘った「くびれ鬼」なのに、私達こそが人間の皮を被った化け物……モノノ怪に他ならないのに、そんな私たちの所為で彼女が人から恐れられ、お化けや化け物と言われる存在になったあげくに、……おとぎ話のように切って退治されてめでたしめでたしだなんて、認めない。
そんな結末、絶対に認めない。
だから、私は足に力を入れて立ち上がる。
美紀に投げつけた上履きはもう拾って履く気力もなかったけど、樹里が投げ捨てたお守りは……私の罪の象徴は拾い上げ、教室の扉に向かう。
「……どこへ、行く？」
薬売りさんの問いに、私は答えない。きっと、言わなくてもこの人はわかってる。だから言う必要はない。
私がこの人に言うべき言葉は、私の逝くべき場所じゃない。
「薬売りさん。……『くびれ鬼』を、……いつきさんを、斬るの？」
薬売りさんに、問う。
いつきさんが被害者で私達こそが加害者であったことを知っても、それでも彼女を「モノノ怪」と言って斬るのか、と。
「――――人の世にあるモノノ怪は、斬らねばならぬ」

そう、答えた。
最初から変わらない、淡々とした言葉。
けれどそこに何か、苦いものを、飲み干せない何かを無理やり飲み下したような意思が見えた。
それは私の勝手な期待かもしれない。
けれど、それでも、私は信じる。
あなたを信じて、私は薬売りさんに背を向けたまま、教室の扉の前で頼みごとを一つ、伝える。
「薬売りさん。斬るのは少しだけ……、私もそこにぶら下がるまで待って。
……いつきさんがあんな『形』になった『真』と『理』が、私たちに対する憎悪と復讐なら、私が死ねばもう……いつきさんはやめるかもしれない。
『くびれ鬼』なんかじゃなくなるかもしれないから、……もう少しだけ待って。
……私が死んでも、いつきさんがいつきさんに戻れないのなら……、いつきさんほど酷くなかったとはいえ、いつきさんと同じように樹里たちにイジメられて、逆らえなかった、助けられなかった人たちまで、復讐の対象にしてしまうのなら……その時はお願い。斬って。
斬って、いつきさんをいつきさんに戻してあげて」
私の知るいつきさんは、私たちはともかく他のクラスメイトは恨んでなかった。
いつきさんを庇ったクラスメイトはいなかった訳じゃない。けど、樹里たちはその庇った子の妹を階段から事故を装って突き落として大怪我をさせた。
そのことを、いつきさんは「自分の所為だ」と言って自分を責めていたから、庇えないクラスメイトのことを恨んでなんかいなかった。
主犯である私たちはともかく、傍観者になるしかなかった人たちまで復讐の対象にしてしまえば、それはもういつきさんじゃない。
だから、そこまで彼女を歪ませた私たちはこの命で償うから、どう

かいつきさんを人として死なせてあげてと告げ、私は廊下に出る為に教室の戸を――――

「それは、出来ません、ね」

開ける前に、私の肩に剣が置かれる。

窓際に落ちた剣を拾っていたのだから、私と薬売りさんは相当距離があったはずなのに、いつの間にか足音一つ立てずに私の後ろにまでやってきて、私を止める。

「……そもそも、あんたは勘違いをしている。

いつきさんの……『くびれ鬼』の『真』と、『理』は、あなた達への憎悪でも、いじめられて、自死に追い詰められた復讐でも、ない」

「え？」

足音なしで近づかれているのは予想外だったけど、止められるのは想定内だったから、悪いけど私は無視して教室から出るつもりだった。

でも、薬売りさんの指摘に思わず素で声が出て、振り返る。

「これが、違うと言っている」

振り返ると、薬売りさんは私に剣を、柄の先についた鬼か猿っぽい頭を突き出して断言する。

今更、この発言に「何言ってるの？」とは思わないけど、別の意味で「何言ってるの？」と思ってしまう。

「待って！　私は何も嘘をついてないですよ!!」

「……ええ。そこは、疑っちゃおりません。それが間違いなく、あんたの『真』なんでしょう。

だが……『くびれ鬼』にとっては、違う」

違う？　私と、結花さんに美紀に樹里の４人を死に誘う事が、憎悪でも復讐でもない？

じゃあ、いつきさんは、あの優しい人が何故、こんな惨くて悍ましいことをしたというの？

「……ところで、そのお守り」

「はい？」

私はもちろん、樹里や美紀にとっても当然の前提が覆されて混乱し

ているのに、薬売りさんはマイペースに話を変えた。
私が拾い上げて持っているお守りを、剣を持っていない右手で指さし言葉を続ける。
何故か、剣を持つ左手は高く上に上げながら。
「いつきさんが、赤子の時に亡くなられた、父親の形見……にしては、そのお守り袋、汚れてはいるが……」
そこまで言われて、私は思い出す。
私は私にとっての「真」を全部語っていた。
けれど、この人は気付いていた。
私にとって「真」だけど「嘘」だったことに、気付いていたことを思い出す。

「妙に……新しくないか？」

「嘘」が突き付けられると同時に、薬売りさんは私の脳天に向かって勢いよく、振り上げていた左手を、剣を振り下ろした。

＊　＊　＊

「――――やはり、な」
薬売りさんは呟く。
苦し気にかすれた声で、それでも自信たっぷりに、確信に満ちた声を言った。
「彼女を守ったな」
私にではなく、背後の「くびれ鬼」に。
窓に貼っていたお札を一瞬にして黒く染めて、ボロボロに崩れ落としてから窓を破った、無数の縄と腕、そして結花さんに美紀、樹里の

遺体に全身を掴まれ、縛られ、しがみつかれて、窓の外に吊るされようとしながらも、彼は獲物を見つけた猫のように、犬歯をむき出しにして凄絶に笑って語る。
「あんたにとってあんた自身は……この三人と同罪の罪人かもしれない。けれど……いつきさんにとっては、違った。
あんたは、我が身可愛さで、いつきさんの友達のフリをして、彼女たちの命令に、従っていたんじゃない。
いつきさんを守る為に、そのフリをしていたのだろう？　物を壊せと言われたら、自分の物を、金を盗めと言われたら、自分の金を差し出して、あんたは自分を盾にして、八方美人、裏切り者の汚名を被ってでも、いつきさんを、守り続けてきた。
……彼女が死んでも、彼女が大切にしていた形見を……守ろうとしていた。
そのお守りは、よく似たものを買って、古いものに見えるように汚した、偽物なのだろう？　あんたが実行しないと、彼女たちが他の者に無理やりやらせて、被害者が増えるから……わざわざ偽物を用意して……守ったんだな」
そんなことを言っている場合!?　と言ってやりたいのに、薬売りさんは言葉を止めない。
私が薬売りさんの剣を、脳天に振り落とされる直前に止まった、初めから寸止めするつもりだったであろう剣を掴んでその場に踏ん張って、棒引きみたいに薬売りさんが窓の外に落ちるのを、吊るされるのを防いでいるけど、そんなのいつまでもつかわからないのに、……首を絞められているのに、この人は語るのをやめない。
「……あの、樹里さんとやらを襲うのが遅かったのは……彼女があなたを離さなかったから、巻き添えにしない為に、なかなか手を出せなかった……ということか。
今も、そうだろうな。あんたが剣を掴んでいるから、引き寄せる力がさほど、強くない」
「薬売りさんにちょっと余裕がある理由はわかったけど、それでも言ってる場合!?」

言ってる余裕はないと思ったから言わなかったけど、あんたがんなこと言うなら突っ込むよ！

遠慮なく、黙れって言わせてもらうよ！

そう思って突っ込んだけど、薬売りさんは徐々に、徐々に後ろに引きずられていく。私か薬売りさんのどっちかが力負けして、命綱である剣がいつ手からすっぽ抜けてもおかしくないのに、口で言うほどの余裕なんかないはずなのに、私が思うよりずっと余裕があるような口ぶりで黙らない。語り続ける。

いつきさんの、「くびり鬼」の「真」と「理」を、語る。

「言う必要があるから……言ってるんだがな。

……あんたに守られていたことを、いつきさんは知っていた。だからこそ、許せなかった。

自分が死んで、次に甚振られる生贄に、あんたが選ばれたこと。その材料に、自分の死や形見を使われること。あんたに守られておきながら、あんたを傷つける原因になった自分が……。

……あんたを、自分を助け続けてくれたあんたを守る事。それが、『くびれ鬼』の、『真』。

……助けられた恩を返したい。あんたがしてくれたように、彼女もあんたを守りたいという願い。それが、『理』」

薬売りさんが語る「真」に、『理』に、私が持っている側に着いている剣の頭は再び口を大きく開いてから歯を鳴らす。

肯定する。

けれど、違う。絶対に違う!!

それは「真」じゃない!! 「理」じゃない!!

「違う！ それが『真』の訳がない!! それがいつきさんの『理』な訳がない!!

だって、いつきさんは死んだ！ 自分で命を絶った!! 私が本当にちゃんと彼女を守れていたのなら、いつきさんは死ななかった！ 死ぬ理由なんてなかったはずだ!!

お守りだって、死んじゃったいつきさんの為じゃなくて生きている誰かの為のつもりで用意したんだ！ いつきさんの家に線香をあげ

に行ったのだって、家に行ったことにしないとこれがいつきさんのだっていう説得力がないから！　私はいつきさんの為になることなんて、何もしてない！　何もできなかった!!
私のしていたことは結局、私の自己満足でいつきさんを全然助けてなかったから！　守れてなかったから！　だから……だから!!」
違う。信じない。信じたくない。
守れてなかったのに、あなたが死を選ぶのを引き留めることが出来なかったのに、それなのに彼女は私を守っているなんて信じない。
それもこんな……こんな……、人を殺すなんて手段で……私なんかを守るなんて……。
信じたくない。信じられない。
だけど「くびれ鬼」は、樹里たちの死体の口を借りて私に語り掛けてきた。
『ドウ……シテ……泣イテ……ルノ？　誰ニ……イジメ……ラレタノ？』
結花さんの口で、私を心配する。
『大……丈夫……ヨ。私ガ……守ル……カラ。今度ハ……私ガ……守ル……カラ……』
美紀の口で、私を守ると言って励ます。
『私ガ……守ル……カラ……ダカラ……オ前ハ、死ネ!!』
樹里の口で……薬売りさんに死ねと命じる。
私を守ると言って、私に殴り掛かった、殴り掛かるフリだったのに「くびれ鬼」に操られている死体は薬売りさんの首に手を掛ける。
無数の首吊りの縄と化した両手が薬売りさんの首を、手足を、髪を掴んで、全身に巻き付き、絡みついてしがみつきながら、窓の外に引きずり落として薬売りさんの首を吊ろうとする。
「……あなたを守りたいという想いだけではなく、いじめの首謀者への憎悪、あなたを悲しませた罪悪感が、いつきさんの望み、を歪ませたのだろうな」
それでも、薬売りさんは語る。
綺麗な白い顔に爪を立てられて、初めから描かれている化粧とはま

た別の赤い筋が出来ている。
首にも爪がめり込んで血が垂れ流れているし、右肩のあたりからゴキッと音がした。強く引っ張られ過ぎた所為で、肩が外れたのかもしれない。
なのに、苦痛を顔に表さずに薬売りさんは私を真っ直ぐに見て言った。
自分が信じたくないものから、眼を逸らそうとしている卑怯者な私に言う。
「あんたの『真』と、いつきさんの『真』は、どちらも真実だからこそ、分かり合えない。
だが……このままでは彼女は、あんたの為に悪意のあるなしも、あんたの意思すらも関係なく、あんたを僅かばかりでも傷つけかねない者に襲い掛かる、災いそのものに成り果てる……。
それは、事実だ」
わかってる。わかってるよ。
もう、全部わかってる。もう言わないよ。信じないなんて。信じたくないなんて言わない。
けど、ごめんなさい。薬売りさん。これだけは言わせて。
「……お願い、薬売りさん。
――――斬って！『くびれ鬼』を！　もう誰も殺さないようにこのモノノ怪を斬って、いつきさんを助けて!!」
私の自己満足が結局、いつきさんをこのモノノ怪に至らせたのなら、ここで終わらせて。
このワガママだけは、言わせて。
「――――承知」
私のワガママに、薬売りさんは応えてくれた。
「『真』と、『理』によって、剣（つるぎ）を――――解き、放つ!!」

薬売りさんが誰かにそう宣言するように言い放った直後、剣の頭の口が動いて同じように「トキハナツ!!」と叫んだ。
その瞬間、いくら「くびれ鬼」が引っ張ろうがびくともしなかった退魔の剣が、呆気なくするりと鞘から抜けた。

＊　＊　＊

瞬きをしたら、目の前から薬売りさんは、樹里たちの死体と「くびれ鬼」の無数の縄の腕に絡みつかれていたはずの薬売りさんが消えていた。
「……く、薬……売り……さん？」
代わりに、剣が抜けた拍子にしりもちをついて座り込む私の背後に人が立っている。
立って、私の手のうちにある剣を、火柱のような刀身の剣を受け取った人は薬売りさんとは別人に見えた。
共通点なんてエルフ耳くらい。
白目部分が黒くなって、アルビノのように真っ赤な瞳に、浅黒い肌。髪こそは薬売りさんと同系色だけど、この人の方が色素が薄い。白髪だ。
体格も、服装で正確にはわからないけど華奢に見えた薬売りさんに比べて、明らかにこちらの方が筋肉質でガタイが良い。
そもそも、服装だって全然違う。共通点は和装ってぐらいで、この人が着ているものには袖がなくて金色。模様は金糸で刺繍されているのかよくわからない。
目を引いた隈取のような化粧は、顔だけじゃなく腕や大きく開いた胸元から見える胴体にも及んでいる。
ううん。そもそもこれは化粧じゃなくて刺青かもしれない。隈取というより幾何学的な金色の模様が光り輝いていた。
他人にしか見えないほど、違う部分ばかり。けれど、他人はあり得

ない。
　ここまで違っていたら、顔立ちが似ているのかどうかさえもよくわからないけど、それでもあの人が持つ雰囲気とこの人の雰囲気は同じだった。
　近寄りがたくて、捉えどころがない。
だけど、それでもきっと優しいのだろうと思わせる眼差しでその人は私を見下ろし、一度私の頭を手で撫でてくれた。
『ドコ!?　アイツハ、ドコ!?
　死ネエエエエエエエエエエッッ!!』
「くびれ鬼」はこの金色の人を薬売りさんと認識していないのか、薬売りさんを探すように辺りに腕が這いまわり、樹里たちの死体もアリスのチェシャ猫のように体が紐状に解けてそれは「くびれ鬼」の腕となる。
　金色の人は無言で、剣を持っていない右手を広げて私に何かを投げつける。
　それはお札。薬売りさんのとは違って金色のお札が私にぶつかる前に空中で止まり、一枚だけかと思っていたお札が何枚も分裂して壁を作る。
　そして、剣を両手で握って構えると火柱のような刀身はさらに大きな業火のような刀身になる。
　それを無造作に振るうだけで、縄の腕は、「くびれ鬼」は焼けるように崩れ落ちてゆく。
「くびれ鬼」だけではなく、教室そのものも。
　まるで模造紙に背景でも描いてその辺に貼り付けていたように、金色の人が剣を振るうたびに世界そのものがボロボロ崩れて、崩壊していく。
　あぁ、そうか。ここはいつしか、「くびれ鬼」そのものだったんだ。
　剣によって斬られ、焼かれた「くびれ鬼」と、「くびれ鬼」が作り上げた世界は剥がれ落ちていって、辺りはだんだんと何もない、ただ

真っ白な空間になってゆく。
その空間の奥に、「彼女」はいた。
「……いつき……さん？」
艶やかな黒い髪が綺麗な、病的なほどに色白で細身の、実際に病弱だった女の子。
鳥居　いつきさんが私の正面に立っている。
……その細い首に、太い麻縄を巻き付かせて。
それでも、彼女は微笑んでいた。
いつしか金色の人が作ってくれたお札の壁はなくなっていて、辺りには何にもない。
私といつきさん、そしてその間に金色の人が剣を持って立っているけど、いつきさんを斬ろうとはしない。
だから私はとっさに、いつきさんのもとに駆け寄ろうとした。
けど、後ろから肩を掴まれて止められる。
「いくな」
それは、薬売りさんの声だった。
私の肩を掴んでいる手も、紫色に染まった綺麗な爪、女の人のように長くて綺麗な指の手。間違いなく、薬売りさんの手だったけど、なんとなく私は振り向いてはいけない気がした。
神話の時代からの約束事のように、振り返ってしまえば全てが終わってしまう気がしたから、私はいつきさんと向き合ったまま彼の話を聞く。
「いつきさんはもう、彼岸の者だ。此岸でまだ生きる気があるのなら……越えてはならない」
……なら、あの金色の人は？　と訊く気にはなれなかった。
ようやく、何で薬売りさんではなくあの人が剣を使っているのかわかった。
あの人は……彼岸の住人なんですね。
駆け寄りたかった。駆け寄って、あの首の縄を引き千切ってしまいたかった。此岸（こっち）に彼女を連れ戻したかった。
けど、それは出来ない。許されない行為だと言われたから。

まだ、私は死ねないから。
あなたが望むのなら、それが償いになるのなら死んでも良かったけど、あなたの心が少しでも癒されるのなら、いくらでもこの命をあげれたけど……。
けど、私はもういけない。
駆け寄ろうとした時、眼を見開いて悲しげな顔をあなたはしたから。
薬売りさんに止められて、心の底からホッとしたような顔をしたから。
あなたが、いつきさんが私の生を望んでくれたから。
だから、いけない。死ねない。死なないよ。生きてゆくよ。
「いつき……さん！」
生きてゆくよ。けど、あなたに何を言えばいいのかわからないの。いくら謝っても、謝り足りないの。
言葉が出てこない、泣くしかない私にいつきさんは困ったように笑う。
もう目の前で、金色の人が剣を振りかぶっている、火柱のような刀身が振り落とされる間際である事に気付いていないように、そんなの些細なことだと言うように彼女は笑ってた。
笑って、言った。
『――――ありがとう』
……どんな些細なことでも、「ありがとう」と「ごめんなさい」を忘れないで言ってくれる彼女が、そう言った。
「ごめんなさい」ではなく、「ありがとう」を選んで私に告げてくれた。
「斬って」と願った私に、それが救いになると勝手に決めつけた私なのに、彼女はお礼を言ってくれたから、私の言葉もやっと決まる。
「……こちらこそ。ありがとう、いつきさん」
私は、ちゃんと笑って言えたかな？
剣に斬り払われて、焼き払われた瞬間さえも笑っていた彼女のように。

＊　＊　＊

あの「くびれ鬼」のモノノ怪を、薬売りさんと金色の人が斬ってはや三日。

私はいつきさんのお墓に、線香とお供えのお菓子をあげてから手を合わせて、お礼を言う。

「……ありがとう。いつきさん。三人とも、殺さないでくれて」

そう。あの「くびれ鬼」は意外なことに実は誰も殺してなかった。あの窓の外に吊るされていたのは幻覚だったみたい。

いつきさんにはちょっと申し訳ない表現だけど、たぶんあれは猫が捕まえたネズミや虫を飼い主に自慢しに来るような心境だったんだろう。

樹里たちがいつきさんにされたことは、あの縄の腕に捕まって首を吊っては目覚めてもう一度首を吊るという夢を見せ続けられたらしいので、長時間続けば精神がヤバかったかもしれないけど、今のところはまぁ不登校になっちゃったくらいで済んでいる。

正直、「何だその程度か」と思わなくはないけど、神様でも被害者本人でもない私が罰を決めるのは傲慢だ。

だから、これで良かったんだと思おう。

いつきさんは誰も殺していない。それだけで十分だ。

……ただ、わかっていたのにそれを言わなかったあなたにはちょっと怒ってるよ。

「薬売りさん、初めからいつきさんが樹里たちを殺さないのわかってたから、結界をわざと一部だけしか張らなかったでしょう？」

「……おや？　いつから気付いてました？」

衛生の関係で置いたままにはしておけないお供えのお菓子を回収しながら、私の後ろにいるはずの薬売りさんに話しかけると、のうのうと現れて私の隣に並び立つ。

三日前はいつきさんを斬って、辺りがただの教室に戻った時にはい

なくなっていたけど、この人の存在を夢だとは思えなかった。
そして何の根拠もなく、また会えると思ってた。いつきさんのお墓参りに来たのも、その期待があっての事。
ごめんね、いつきさん。けどついでなのは薬売りさんの方だからね。
「いつからって、あなたさっき鈴の音鳴らしたでしょ？」
そう言いながら横目で睨むと、薬売りさんはまったく悪びれた様子もなく笑っており、代わりにか音の主であろう天秤が一つ、私の肩にまたちょこんと乗ってペコリと頭を下げるように傾いた。
……これ、もしかして意思あるの？　なんか可愛いな。
私がもういいよと言って、天秤さんの頭（？）を指先で撫でてやれば、喜んだようにぴょんと跳ねてからスイッと浮かび上がって勝手に薬売りさんが背負う箱の中に帰って行った。
あれはもしかして、私が初めに拾った天秤なのかな？　個人意思まであるの？
まぁそれは横に置いておこう。
それより、せっかく会えたしまた会える保証は一切ないだろうから、私は薬売りさんにいつきさんのお墓に備えたフルーツ大福を勧めつつ、ちょっと残っている疑問に答えてもらう。
「薬売りさん、あなたいつからいつきさんの『真』と『理』に気付いてました？」
勧めておきながら、この人、もの食べるのかな？　とこっちも本気で疑問だったけど、薬売りさんは普通にブドウ大福をつまんで食べながら、私の問いに答えてくれた。
「まぁ……正直、最初から『真』と『理』に予想はついてました、よ。
けど、さっさと斬ってしまっては……加害者（かのじょ）たちばかりが得をして、癪でしょう？　あの『真』と『理』なら、殺しはしないと思いましたので、ちょっとばかりお灸をすえる手伝いを、させていただきました」
「……そこは否定しませんけど、どうして最初からわかったんですか？」

しれっと人でなしなのか人情に溢れているのかわからない答えを返されたけど、「最初から」というのは私の想像通りだった。ただ、何で「最初から」わかっていたのかが私にはわからない。

だけど薬売りさんは「何でわからない？」と言いたげな眼をして、今度はミカン大福をつまんで答えた。

「あんたが、『真』に関わる関係者だったから、ですよ。

……俺が落としたものを拾って、汚れを拭いて、急いでいるのに逆方向の交番に届けようか迷って、わざと驚かせたことに気づいても怒らない、不審者でも助けられたと思えば、まず最初に礼を言う人が、巻き込まれただけならともかく、関係者なら、何らかの誤解がない限り、あんたを含めて『復讐』が『真』は、あり得ないと思ったんですよ」

その即答に、私は言葉を失う。

この人、あの直前に出会った初対面の私のそんな些細な行動を根拠に、私が復讐対象はあり得ないって断言するの!?

私にとっては過剰すぎて恥ずかしい信頼だけど、結果的に真実だったせいで何も言えない、ただただ私が恥ずかしい目に遭っているのに、そんな目に遭わせた当の本人は遠慮なく大福をひょいパクと食っている。

食事するかどうかを疑問に思ったけど、意外と健啖家だなあんた！

「……ところで、あんたの名前は？」

「はい？」

そしてやっぱりマイペースに、話を脈絡なく変える。

いや、確かに名前をそういや名乗ってなかったし、もしかしたら樹里たちにも呼ばれてなかったけど今更、このタイミングで訊く？

「いつまでも、『あんた』と呼ぶのは、失礼だろう？」

しかも「何言ってんだ、この人は？」という目で見る私の方がおかしいかのように、薄く笑ってこの人は言うけど、それ本当にあんたが言う？　薬売りとしか名乗ってないあんたが。

っていうか、いつの間にか薬売りさん、私に対して口調が雑くなってない？　初めは呼び方、「あなた」だったよね？　一人称もさっき「俺」を使ってたけど、最初は「私」だったよね？

何？　素が出てきたの？　……それはちょっとなんか嬉しいから許そう。
ただ私、自分の名前は気に入ってて好きなんだけど、音だと漢字がわからず別の単語を連想するから、名乗るのは好きじゃないんだよね。
けどここで名乗らないときっと一生後悔するから、私は名乗った。
「ヒトリ、です。漢字は……」
「――――火の鳥。炎の鳥で『火鳥（ひとり）』さん、ですか？」
説明する前に正解を答えられて、私はまたしても言葉を失う。
けど今度はちょっと驚いただけなので、すぐに回復して「よくわかりましたね」と言えた。
「……同じ名前で、そう書く人を知っているんでね」
「へぇ。そうなんですか。私、自分の名前は好きですけど音だと一人っきりの『一人』と一緒だからか、同じ名前の方にあったことないんですよね」
そのまま、私と薬売りさんは雑談を続けた。
また会える保証はないけど、だからこそ辛気臭い話はあまりしたくなかったから、それで十分だった。

その雑談に夢中になって、私は気付かなかった。
薬売りさんの箱の中、あの剣が仕舞われている箱の中で「カチン」と音がしたことに、私は気付かなかった。

弐・人魚忌憚

人魚：序の幕

それはまだまだ新米の看護師、野本（のもと）　加世子（かよこ）にとって日常茶飯事の出来事だった。

看護師にとって、それは日常。彼女にとってまだ慣れてはいなくとも、経験したことのない出来事でもなければ、今までと逸脱している訳じゃない出来事……だったはず。

「うぅ……。くっ……あぁ……」

「！　富士野さん!?」

加世子が担当している、寝たきりの高齢老女の患者が弱々しく心臓のあたりを抑えて呻く。

もちろんすぐに加世子は担当医師を呼び、自分も出来る限りの処置を行うのだが、彼女は知っている。この患者はもう助からない事を。

この老女は癌などといった特に大きな病気はないが、歳の所為で心臓がもう弱りに弱りきっている。こんな発作は、もはや珍しいものじゃない。

病気ではなく加齢で心臓の働きそのものが弱まっている訳なので、薬や手術でどうにか出来るものじゃない。

仮にどうにか出来たとしても老女にはもう、手術はもちろん薬の副作用に耐えられるかどうかも怪しい体力しかない。

だから加世子たちがしていること、出来ることはこの老女の苦しみを少しでも和らげること。

けど、きっともう終わり。

医師が昨日、患者の孫に「今日のような大きな発作がまた出たら、覚悟しておくように」と言っていた。そして今の発作は、明らかに昨日と同じくらいかそれ以上。

加世子に出来ることは、医師が来るまで気道を確保しながら患者を励ますことだけ。

「だ、大丈夫よ、富士野さん！　頑張って！　ほら、明日お孫さんがプ

リン作って来るって言ってたじゃない!!」
加世子は少しで患者が生きる気力を失わないように、励まし続けた。
治すことも出来ないのだから、もういっそ死なせてあげた方が優しさなのかもしれない。そんな考えは一瞬どころか、励ますことと並行して浮かび上がる。
この考えは看護師として失格なのかもしれない。けれど、看護師だからこそ加世子はそう思ってしまうほど酷い、生き地獄としか言えない状態の患者を知っている。
加世子は決して人でなしではなく、むしろ見た目は看護師にあるまじきギャル風なのに、心根は素朴で人情に溢れているからこそ、そのような思いは決して消えない。
だけど、だからこそ加世子は自分の浮かんだ思考を振り払う。
この患者は違う。死が救いじゃないと言い聞かせる。
看護師としてではなくそれは完全に加世子の個人的な願望でしかなかったが、この患者にはまだ生きていて欲しかった。せめて、せめて明日まで。
昨日、医師から余命はもう幾ばくも無いことを宣言されても、涙をこらえて意識がハッキリしていない祖母に優しく話しかけていたあの孫娘との約束を果たしてほしい。
その一心で加世子は、患者に声を掛け続ける。
「富士野さん！　お孫さんの花嫁姿を見るまで死ねなかったんじゃないの!?　それは無理でも……せめて、一緒にプリン食べるくらいの約束は守ってあげようよ……」
どんどん呼吸が浅くなっていく患者に加世子は出来る限りの処置を施しながら話しかけていると、皺と皮のたるみで起きていても細かった患者の目が急にカッ！　と開いた。
「!?」
そして、患者の両目が開いたことに驚いてとっさに引いた加世子の手を、死に掛けの老女……富士野は掴む。
枯れ木のように細い、骨に皮が貼り付いたようなカサカサの老人の

手なのに、痛いくらいの力で掴んで富士野は息絶え絶えに、それでも命を燃やすように必死になって加世子に伝えた。
「お……ねが……い……。呼ば……ないで……」
「え？」
心臓の発作による激しい痛みも無視して、止まりそうな呼吸よりも優先して言葉を吐き出す。
富士野は懇願した。
「あの……子を……孫を……ここに……呼ばない……で……」
自分の孫を呼ぶなと加世子に頼み込む。
一瞬、「あんなに可愛がっていたのに何で!?」と加世子は思って狼狽したが、富士野の懇願は「死んでも会いたくない」などといった気持ちではなく、可愛いからこそ呼んでほしくないという愛情だった。
けれど、それは自分の死を知って孫が悲しんでほしくないという意味ではない。
もっともっと、シンプルな理由だった。
「……れる」
「え？」
かすれた、ほとんど声にならない声で富士野は言った。
加世子は、よく聞き取れなかった。聞き間違いだと思った。
だから訊き返したかったが、富士野が言った直後のタイミングで医師たちがやってきて、富士野も最後の力を振り絞って言ったからか、見開いていた眼は閉じてそのまま加世子の手首をつかんでいた力が抜ける。
その後は、医師の指示に従って動くのに精一杯で加世子はよく覚えていない。
富士野が一命は取り留めたところでやっと一息を付けたくらいだが、それは本当に一命。せいぜい数時間ほどの命。
もう自力で呼吸をすることも出来ないから、人工呼吸器が外れるだけで終わる。外さなくてもきっと朝には、この弱りに弱り切った心臓は止まると医師が言った。
この命は、最期のお別れの為だけに延ばされた命。

だから加世子は、重々しい気持ちで連絡した。富士野の唯一の身内である孫娘に祖母の危篤を知らせて、面会時間外だがこちらに向かっている彼女を、見舞客用の休憩室ベンチで待つ。

待ちながら、思い出した。

多分聞き間違いだと思う、訊き返せなかった富士野の言葉を。

自分の命よりも、孫を心配して言った彼女の言葉を伝えるべきかどうか一瞬悩んだけど、すぐに「伝えてどーする？」と自分で自分に突っ込みを入れた。

突っ込みを入れつつ、自分が聞き取った言葉を反復する。

（ホント、伝えてどーすんのよ。『人魚に殺される』、なんて）

祖母の最期の言葉すらちゃんと伝えることが出来ない事を、加世子はまだ来ていない富士野の孫娘、火鳥（ひとり）に心の中で謝った。

＊　＊　＊

「加世子さん！　おばーちゃんは!?」

もう面会時間を過ぎてる夜の病院の廊下を、パタパタと足音を立てて加世子に駆け寄ったのは、日本人にしては少し赤みが強く思える髪の可愛らしい少女。

まだたったの１４歳の少女、火鳥が泣きだしそうな顔で駆け寄り、縋りつかれて加世子は一瞬言葉を失う。

普段はどんなに急いでいても、病院の廊下を走ったら迷惑だとわかっているから走らない子であるのを加世子は知っている。なのでその行動が彼女の余裕の無さを如実に表している。

いや、余裕のなさなど火鳥の格好を見るだけでも十分すぎるほどわかる。

もう風呂に入って後は寝るだけだった所に連絡を受け、慌ててこちらにやって来たのか、コートこそはダウンだが中に着ている物は薄いワンピース１枚で、足は室内用のもこもことした靴下にサンダルといったチグハグすぎる姿だった。

それでも面会時間外どころかあと１時間ほどで消灯の時間なのを

わかっているからか、声の大きさこそは控えめな気遣いが出来てる。それがむしろ加世子には酷い痛々しく見え、彼女に危篤を知らせたことを激しく後悔する。

まだ中学生の子など病院側から呼ぶことはいくら危篤でも普通はしないのだが、富士野の身内は孫の彼女しかいない為、前々から必要な手続きは全て彼女が行っていた。

それに歳のわりにしっかりした子というのが、加世子たち看護師や医師が懐く火鳥の印象だったのでつい呼んでしまったが、この時になって加世子はようやく理解した。

彼女はしっかりしているのではなくしっかりするしかなかったと、今にも溢れ出しそうなほど溜まった涙を見るまで加世子は気付けなかったことを激しく後悔しながら、「あたしの持ち前の明るさをここで発揮しなくてはどうする!?」と自分を叱咤して、笑顔を作って言った。

「火鳥ちゃん。大丈夫よ、……大丈夫だから、ね」

自分に縋りつく火鳥に加世子が言った言葉は、本人が白々しすぎて説得力など皆無であることを自覚していた。

笑顔の裏で、自己嫌悪が加世子の心を苛む。

(……何が、大丈夫よ。

富士野さんはもう……、火鳥ちゃんに『さよなら』すら言えないのに。きっとあの人はもう意識を取り戻さないまま亡くなる。別れの言葉も交わせないのに……)

なのに、火鳥は加世子の言葉に淡く微笑んだ。

「……そう、ですよね。約束……しましたもんね、。明日……私とおばーちゃんと加世子さんとで、プリンを食べようって。

ちゃんと、作ったんですよ。加世子さんのはリクエスト通り、牛乳プリンを」

火鳥の言葉に、加世子の涙腺が一気に緩む。

加世子の言葉は拙い嘘である事くらい、火鳥はわかってる。わかっているはずなのに、彼女は加世子の言葉に騙されたフリをしてくれてる。

騙されたフリをしつつも、心から信じてくれている。
加世子の「大丈夫」を。加世子自身も信じていたい、これが真実であればいいと願う「大丈夫」を信じて、明日の約束を口にするこの子の健気さに緩んだ涙腺を締め上げて、加世子は歯をむき出しにして笑う。
「そうよ。楽しみにしてるんだから、富士野さんには頑張ってもらわなくちゃ」
笑って言ったが、病室に入ってしまえば自分たちの期待はあまりに儚い夢想であったと思い知らされる。
人工呼吸器に繋がれ、心電図はあまりに小さな波しか描かないか細い老婆は、どう見ても朝まで生きてゆけるとは思えなかった。
それでも、火鳥は眼に浮かび上がった涙を零さなかった。
それは現実逃避のようなものだったかもしれない。認めたくないからこそ、泣いて縋り付いて「死なないで」と言いたくなかっただけの弱さかもしれない。
それでも、加世子にはこの少女がとても強く見えた。
「……おばーちゃん、寒くない？　大丈夫？
あのね、庭の椿がすっごく綺麗だよ。雪がちょっと積もって白い雪の間から瑞々しい赤と緑が本当に綺麗で、写真を撮ったんだ。
おばーちゃんが教えてくれたプリンも、上手に作れるようになったよ。おばーちゃんの好きな、蒸したてのあったかいプリンじゃないけど、美味しいよ。
だから……、明日見ようよ、写真を。食べようよ、プリンを。一緒に」
祖母の眠るベットの傍らに座り、枯れ木のような手を慈しむように握って優しく話しかける。
もうこの老女の命を繋ぐのは、人工呼吸器と生きたいという気力だけであることを理解しているからこそ、火鳥は祖母の生きる気力を決して途絶えさせぬように話しかけ続けた。
そんな火鳥の背中を見つめ、加世子は祈る。
どうか、富士野の意識が数分でもいいから戻ることを。

もう加世子には富士野がこのまま奇跡的に回復して退院し、火鳥の花嫁姿を見てひ孫に囲まれるという未来を夢見ることはできない。
それぐらいわかる程度の経験則はある。そんなのは本当に神様の領分の奇跡であることを知っている。
加世子が期待できる、可能性を信じられるのは、最期に富士野が孫と別れの言葉を交わす程度に意識が戻る事だけだった。
けれど、それさえも奇跡に等しいことを加世子は知っている。
加世子が医師に火鳥が来たことを告げれば、医師は火鳥に富士野の容体、人工呼吸器をつけていても彼女の心臓はもう数時間ほどで止まることを宣告する。
延命手段はあるにはあるのだが、入院する際に富士野の意思で延命処置はしない、するとしたら最期に看取ってもらえる程度の時間稼ぎに留めておいてほしいと言われており、火鳥もそれに同意している。
だから、この孫と祖母のやり取りも医師がくれば終わり。
医師によって現実が突きつけられた時、火鳥はどうするのかが加世子には想像がつかなかった。
堪えきれずに泣くのか、それともやはり涙を堪えて、「歳よりしっかりしている子」として手続きを行うのか。
どちらにせよ痛々しいのに変わりはない。
だから加世子は、本来なら火鳥が来た時点で入れるべき連絡を入れていない、医師を呼んでいないし、呼ぶ気もない。
この事を知られたら、医師やベテラン看護師たちから大目玉をくらうのはわかっているのだが、加世子は「どうせあたしが叱られるのはいつもの事だし」と開き直って、悪あがきを続ける。
信じていたい奇跡を信じて、現実を少しでも遠ざけて先延ばしにした。
一瞬、その罰が当たったのかと加世子は思った。
それほど唐突な、停電だった。
＊　＊　＊
「え!?　何なに何ぃぃ～っ!?」
!?　人工呼吸器!!」

地震や落雷はもちろん、ブレーカーが落ちる音、何かの配線などがショートして弾ける音といった、「停電の前触れ」と思われることは何も起きず、唐突に電灯が消えた。
消灯までまだ1時間近く猶予はあり、そもそも病室の電機は看護師たちが手動で消すし、明かりを全部落とすこともない。夜中でもナースコールが押せる程度に光源はあるはず。
なので完全な異常事態であることを加世子の方が理解していた為かパニックに陥って、火鳥の方が現状を理解しているからこその冷静な心配を抱いて悲鳴のような声を上げた。
が、その心配は杞憂だったことがすぐに判明する。
電灯は消えてあたりは真っ暗だが、光源がない訳ではない。その光源こそが、火鳥の祖母の命を繋いでいる人工呼吸器だった。
人工呼吸器と心電図は変わりなく起動し続けていることに、火鳥と火鳥の悲鳴でパニックが一瞬にして納まった加世子が安堵の息を吐く。
が、それはそれでおかしいことに二人は気づいた。
「……え？　ちゃんと動いてて助かりましたけど……停電でなんで動いてるんですか？」
「さ、さぁ？　災害用の予備電力とか？」
一般人かつ中学生の火鳥が疑問に思うのは当然だが、加世子も何故、電灯が全滅しているのに医療機器は動いているのか説明できない。
幸か不幸か、加世子は看護師になってどころか人生の中でまだ一度も大きな災害の被害に遭ったことがないので、防災意識が低くて停電時の医療機器はどうなるのかをよく理解していなかった。
だが、決して看護師としての意識が低い訳ではない。むしろ今時珍しい熱血ナースの加世子は、富士野の脈拍を測って容体を診ながらナースコールを押す。
しかしどういう訳かナースコールは繋がらないので、ますます訳がわからなくなる。
ひとまず加世子が診た限りでは富士野に何らかの支障はないので、

百歩譲って彼女はこのままにしておけても他の患者はそうはいかない。
富士野にも火鳥にも悪いが、とりあえず他の病室ではどうなっているのかだけでも把握する必要があると判断して、加世子は火鳥にここから動くなと厳命すると火鳥は祖母の手を握ったまま素直に頷いた。
「加世子さん、お気をつけて」
それどころか加世子を心配して声までかけてくれたので、思わず加世子は苦笑する。
唯一の身内の危篤という現状だけでも余裕などないはずだろうに、突然の停電、暗闇の中で今にも死にそうな祖母と二人っきりな状況なんて、加世子なら火鳥と同い歳の頃はもちろん今現在でも耐えられる自信はない。恐怖と不安とストレスが爆発して泣き叫ぶ自分が容易く想像ついた。
だからこそ、少しは目が慣れて見えた暗闇の中、決して不安がない訳ではないとわかる怯えたような表情で、それでも加世子を案じてくれた火鳥に笑いかけて答える。
「大丈夫よ！　心配しないで！　何があっても、たとえ火事でもあたしが火鳥ちゃんはもちろん、富士野さんもベッドと人工呼吸器ごと担いで逃げてあげるから!!」
加世子の言葉に、火鳥は一瞬きょとんとしてから笑ってくれた。
だから加世子も安堵して、瞳孔の確認用のペンライトをつけてひとまず廊下に出ようと病室の戸を開ける。
「!?」
開けた瞬間、加世子は息をのむ。
やはり富士野の病室の電灯だけ急に全部切れたとか故障という訳ではなく、廊下の電灯も非常灯すら消えおり、廊下の端のナースステーションにすら灯りは見当たらない。
これは自分の想像以上の異常事態だと理解した加世子の背に不安が重くのしかかるが、火鳥を不安にさせる訳にはいかず、ペンライトであたりを照らしながら一歩、足を踏み出した。
そんな暗闇の廊下で、やや暗闇に慣れた加世子の眼は何かを捉え

た。
自分の腰くらいの高さで廊下を横切る影を見た加世子は、子供の入院患者が停電でパニック、もしくは面白がって廊下に出たのではないかと思って、とっさにそちらにライトを向ける。
向けた瞬間、「それ」は階段の影に隠れてしまった。
「……誰？　そこにいるの？」
「？　加世子さん、どうしたんですか？」
加世子が階段に隠れた何かに声を掛けて見ると、火鳥はいぶかしげな声を上げて尋ねる。
「見えなかった？　子供っぽい人影が今、通ったんだけど……」と加世子が答えると火鳥は申し訳なさそうに、「すみません、私、鳥目で暗い所はダメなんです。全然、目は慣れませんし光源がないと何も見えません」と返された。
その答えで、なら仕方ないかと加世子は納得しつつ階段に近づく。
「どうしたの？　怖くないから出ておいで」と声を掛けながら。
自分の背後、遠ざかる病室から火鳥が「あ、あの……加世子さん……」と控えめに呼びかける声が聞こえた。控えめとはいえ部屋の中から部屋の外にいる人物に声を掛けているのだから、そこそこ大きな声だ。
病院かつ夜、そして停電中という非常事態でそのような非常識、迷惑と思えることをする子ではない事を加世子はよく知っていた。
だが、子供が停電を怖がって病室から抜け出してしまったのなら放っておけなかったから、火鳥をひとまず後回しにする。火鳥が呼ぶということは非常事態であることを予測していたからこそ、気が逸っていたのもあるかもしれない。
だからこそ火鳥は、自分の声が迷惑になるかもという不安をかなぐり捨てて悲鳴じみた声で呼びかけ、尋ねる。
電灯は全滅だが医療機器は動いている事よりもはるかな異常が発生しているとに気付いていない加世子に、警告した。
「あ、あの！　加世子さん！　おかしくないですか!?

何で、病院全体が停電してるっぽいのに、誰も騒いでないんですか!?」

火鳥の指摘と同時に、加世子は階段にたどり着き照らして見た。

階段の踊り場に、身をくゆらせて水中のように泳ぐ錦鯉ほどの魚を。

白髪が多く混じった黒髪をなびかせ、黄ばんだ並びの悪い歯をむき出しにして笑う人間の顔を。

人間の顔をした魚が、加世子の顔の位置で揺蕩いながら笑っていた。

＊　＊　＊

火鳥の言う通り。例え医療機器は問題なく動いていたとしても、病院全体が停電で誰も騒がないのは有り得ない。

百歩譲って患者はともかく、医師と看護師が何かしら行動に移しているので指示を飛ばす声どころかあたりを走り回る物音が聞こえないのはおかしい。

廊下に出た時点で、廊下もナースステーションも電気がついてない時点でそのことに気付けてもおかしくなかったはずなのに、気付かなかった加世子はまったくパニックから回復していなかったことを理解した。

そして今更、そのことを理解しても遅い。

今、加世子の頭の中に占めるのは「先生や看護師(みんな)たちはどこ!?」「これは本当に停電!?」といった疑問や不安ではなく、目の前の空中を泳ぐ水死体のようにやけに浮腫んだ顔をした人面魚の事だけ。

それも「何これ!?」以外は考えられず、悲鳴さえも上げられないくらいに頭が真っ白になっている所で、人面魚は加世子の頭を丸々飲み込めるのではないかと思うくらいに口を開いて、すいっと泳ぎながら迫ってきた。

「!!??　きゃあああああああぁぁぁぁぁっっっっ!!??」

「加世子さん!?」

その人面魚に自分が食われるという認識を加世子が出来ていたか

どうかは怪しい。
ただただ悍ましいものが自分に迫って来たことだけは、混乱と困惑の極みで呆然自失となっていた頭でも理解出来たからこその悲鳴を上げ、火鳥は加世子を案じる声を病室で上げる。
そして加世子が混乱と困惑の極みだったからこそ起こした行動が、幸か不幸かはおそらく加世子本人もわからない。
悲鳴を上げつつ加世子は後ろにたたらを踏み、人面魚は加世子の悲鳴など意も介さずガチガチと歯を鳴らして迫って来たが、加世子も加世子で人面魚の怖がらせて甚振ろうという余裕など介していない。
ただただパニックのあまり、加世子は躊躇なく起こした行動は……
「気っっ持ち悪いのよー!! 来んなーーっっ!!」
空中を泳ぐ人面魚を拳でぶん殴ることだった。
正確に言うと殴るというより近寄って欲しくないの一心でぶん回した腕が、人面魚の下あごにクリティカルヒットした事故なのだが、どちらにせよ怪物を前にした女性の反応とは言い難い。
人面魚もまさか看護師からアッパーを喰らうとは思っていなかったのか、元々防御のしようもないのもあって勢いよく天井まで打ち上げられて今度は天井にぶつかって地面に落ちるという、もはや憐みさえも懐いてしまう情けない目に遭って、そのまま階段の踊り場でまさしく打ち上げられた魚のように弱々しくぴくぴく身をくねらせた。
「え? え? 何なに、マジで何!? 何なのよ、これはーーっっ!!
あーん、もう手が生臭くなって最っっ低!!」
「え? 生臭い? 加世子さん、廊下で本当に何が起こってるんですか!? あいたっ!」
「火鳥ちゃん!?」
人面魚にアッパーを決めた加世子は、恐怖と混乱のあまりにやや幼児退行してしまったのか、その場に座り込んで現状の不満を喚くと、火鳥がなんか自分の想像とは違う方向で加世子が修羅場っているのに困惑して、壁などにぶつかりながらも病室から出てきてしまった。
さすがにまだ中学生の子に心配された拳句、鳥目で周りが見えない子をあんな化け物がいた廊下に出させる訳にはいかないという一心

が、加世子の折れかけた心を奮起させて立ち直らせる。
しかし、振り返った瞬間に自分の行動の浅はかさを後悔した。
悲鳴など上げてはいけなかった。弱音など吐いてはいけなかった。彼女を守りたいのなら、自分は意地を張り通すべきだったと思い知る。
「いたた……。加世子さん、大丈夫ですか？」
「火鳥ちゃん！　逃げて!!」
「え？」
スマホのライトを懐中電灯代わりにしてこちらに向かう火鳥は、必死の形相で懇願する加世子の視線が自分からややズレていることに気付き、後ろにライトを向けて振り返った。
そこで彼女も見てしまう。
空中を、灯のない病院の廊下を泳ぐ、眼が線になるほど浮腫んだ人間の顔の魚が数匹、自分に向かって大口を開けて迫ってきていることを。
そして同時に、加世子も気づく。
火鳥が病室から引きずって持ってきているものが何かを。
「!?　ぴゃあああぁぁぁぁっっ!!」
妙に気合いが抜ける悲鳴を上げて、火鳥はそれをぶん回して人面魚を壁に叩きつけて撃退。
火鳥が持ってきていたのは、病室で自分が座っていたパイプ椅子。それをわざわざ折りたたんで何故かこの女、ずるずる引きずって持ってきていた挙句に、人面魚に躊躇なくフルスイング。
「何で火鳥ちゃん、そんなもん持ってきてるの!?」
加世子の突っ込みは当然の疑問である。
「す、すみません！　何かつい最近もこういうホラーな経験してたもんだから、護身に」
「護身がダイナミックかつバイオレンスすぎない!?」
「そこは突っ込まないで！　役に立ったんだから！　それより、加世子さん！　一旦、病室に戻りましょう!!」
火鳥がなかなかに信じがたいことを口走るが、加世子は「ホラーな

経験」よりも護身にパイプ椅子を選んだ火鳥の思い切りの良さに突っ込みを入れ、火鳥はちょっと恥ずかしそうに顔を赤くしながら加世子に駆け寄る。
が、彼女も宙を泳ぐ人面魚のインパクトでパニくっていたのと、鳥目が合わさって足元がお留守だったらしく、火鳥は加世子が最初にノックアウトした人面魚を思いっきり踏む。
「あ」
「へ？」
それはもう見事に足全体を魚の腹に乗せるように踏み、不幸中の幸いは踏みつぶして嫌すぎる感触を足裏に感じなくて済んだことだが、魚のぬめりがよく磨かれた病院の床と相性が良すぎてつるんと前のめりに滑り、そのまま火鳥は頭から階段にダイブする形ですっ転ぶ。
「火鳥ちゃん!?」
まさかの人面魚が原因だが人面魚が無関係の理由で大怪我間違いなしの事態に陥るのは、火鳥のパイプ椅子フルスイングより予想外で、加世子は慌てて手を伸ばすが火鳥を支えることも腕を掴んで落下を防ぐこともしてやれなかった。
しかし、運は火鳥を見放してはいない。
「……モノノ怪に、同情してしまう事は珍しくはないが……、こういう意味で同情するのは初めてです、よ」
「え？」
火鳥が下の階の踊り場に墜落する前に、彼女を受け止めた人物がやや掠れているが色っぽい声で、呆れたように言った。
そして女二人は、それぞれ顔を赤くして固まる。
加世子は日本人にしては色黒の顔でも紅潮しているのがわかる程、陶酔した。
暗闇の中に浮かび上がるように、その顔は白い。
その白い顔に歌舞伎の隈取のような化粧、上唇のみ笑みを描くように掃いた紫の紅という、異常さで言えば人面魚と大差ないような化粧を施しておりながらも、一切損なわない美貌に思わず思考が完全に停止してしまった。

そして火鳥の方は、自分の間近にあるその白皙の美貌が既知であること、そして先程の発言からして彼は自分のダイナミックかつバイオレンスな撃退を知っていることを察し、衝撃と羞恥で失っていた言葉が噴火するように思わず口から飛び出た。

「っっっっかぁーーーっっ!!??　く、薬売りさん!?　何でまたこんなとこに!?」

「……もちろん、モノノ怪を斬りにですよ。カラスさん」

「火鳥です！　今の悲鳴は忘れて!!」

数日前、「くびり鬼」を斬った薬売りは火鳥を抱えたままうるさそう顔をしかめて答え、火鳥の顔をさらに赤くさせた。

人魚：二の幕

浅葱色の地に、蝶や蛾の翅を思わせる極彩の模様が描かれた女物の着物に袴。締める海老茶の帯は着物と同じく、女物の幅広。

子供の背丈ほどはある箪笥のような形状の箱を背負い、紫の手拭いに包まれた髪は亜麻色という日本人にあるまじき色素の薄さ。

顔の化粧だけではなく、服装も荷物も何もかもが異常と言える男だった。

和装であるがおそらく服装の常識を江戸時代にまでさかのぼっても、この男の格好を普通と擁護することはできない。

だが、男の姿が異常であり怪しいことこの上ないのは否定できないのに、その怪しさによる危機感を凌駕する程、彼は美しかった。

病院内の異常をすべて忘れて、加世子がぼーっと見惚れるほどに。

しかし自分とは違う理由で、自分と同じく固まって絶句していた火鳥が上げた悲鳴で我に返り、相手が面会時間外の病院という時間や場所の条件を抜いても不審者この上ないことに加世子はようやく気付く。

気付くのだが……、男に抱きかかえられたまま火鳥が羞恥で真っ赤になりつつ叫んだ言葉の所為で、不審者に対する警戒心も緊張感も雲散霧消してしまい、加世子は呆気に取られた様子で呑気に尋ねた。

「え？　火鳥ちゃんの知り合い？」

「……はい。お世話になったというか、現在進行形で世話になっているというか……」

「……その話は、後にしましょう。今は、ひとまず、逃げますよ」

未だ階段の踊り場で座り込んだまま加世子が尋ねると、火鳥は羞恥で真っ赤に染まった顔を隠そうと両手で覆って答え、男は火鳥を抱えたまま階段を駆け上がる。

その背後には人の顔をした魚が宙を泳ぎ、歯を鳴らして迫り寄っていた。

「!?　きゃーっっ！　またなのー!!」

3度目の人面魚の来襲に加世子は悲鳴を上げるが、悲鳴を上げるだ

けで何もしない大人しい性分ではない。
「来んなー！　人面魚ー!!　あたしは食べてもおいしくないし、火鳥ちゃんは美味しいかもしれないけどあんた達に齧らせてやるもんかーっっ!!」
男が火鳥を片腕で抱えたまま、空いた片手で腰が抜けていると思われた加世子を立たせようと腕を伸ばすが、男が腕を掴む前に加世子は自力で立ち上がって、落ちる際に火鳥が手を離したパイプ椅子を掴んで振り回し、人面魚を自分たちに近づかせない。
火鳥のやらかしを突っ込む資格のない加世子の勇ましさに、男はやや眼を丸くしてから何かを懐かしむようにその眼を細めて「頼りになりますね」と呟いた。
幸か不幸か、火鳥は鳥目なので自分たちにまた人面魚が襲い掛かっていることも、加世子のバーサークぶりも見えていないらしく、ガンガンと壁や廊下にぶつかる椅子の音に引きつつも、加世子と自分を抱えている男……薬売りに声を掛ける。
「あの！　とりあえず病室に戻りましょう！　おばーちゃんが心配ですし!!」
言われてちょっと頭が冷えた加世子は、パイプ椅子を持ったまま薬売りの腕を引いて火鳥の祖母、富士野の病室に舞い戻って戸を閉める。
閉めてすぐに加世子の後ろから加世子を避けてはいるが遠慮なく何かが投げつけられ、それが扉一面に貼りつき、梵字らしき文字と眼のような模様が浮かび上がり、眼に至っては見開いて加世子をまたビビらせた。
「……ひとまず、結界を張りました」
前置きなしに札を貼り付けてから説明し、薬売りはようやく抱えてきた火鳥を降ろす。
そして彼女を見降ろし、「またか」と言いたげな怒っているようにも呆れているようにも見える顔で訊く。
「……あんたがいるなら、話が早い。火鳥さん、心当たりを話してもらうぞ」

「今回は何もないですよ!!」
「俺はそっちじゃありません、ぜ」
　またしても元凶だと思われ、冤罪で尋問される火鳥は見えてないので微妙にあさっての方向に抗議して薬売りに突っ込まれるのを眺めながら、加世子が口を挟む。
「ってゆーか！　あたしにまずは説明して!!」
＊　＊　＊
「何なの何なの！　一体全体何が起こってるの!?　電気つかないのは何で!?　先生たちはどこ!?　あの人面魚は何!?
　そもそも、あんた誰!?　火鳥ちゃんの知り合いみたいだけど、答え次第では容赦しないわよこのイケメン!!」
「……加世子さん、罵倒になってません。本音が出てますよ」
　病室に籠城したことで少しはあの人面魚の脅威から逃れたことを実感し安堵したからか、加世子は火鳥を庇うように抱き寄せつつ後回しにしていた疑問を矢継ぎ早に薬売りにぶつけた。
　言ってることはほとんど逆ギレだが、不審者ではなくイケメン呼ばわりしている加世子の正直さ加減に火鳥は苦笑し、薬売りも少し面白かったからか口元をほころばせて答えた。
「私は、ただの薬売りですよ」
「薬売りさん、ごめん！　話がややこしくなるからちょっと黙って！」
　しかしどこでもその自称を貫く薬売りに火鳥は頭痛を覚えながら、加世子が「お前のような薬売りがいるか!!」と突っ込む前に突っ込んで、このもったいぶった言い方しか出来ない男の代わりに説明した。
　数日前に起こった、自分の友達になりたかった人、きっと友達になれた人が互いに思いやっていたからこそ捻じ曲がってしまって変わり果てた、「くびれ鬼」の顛末を。
「……ということは、この人がいればあの人面魚を退治出来るって事？」
　もう既に「病院内に自分たち以外の気配がない」、「空中を泳ぐ人面魚に襲われる」という非現実的な事態に陥っているのもあって、素直な加世子は簡単に説明した「くびれ鬼」に関しての話をあっさり信じ

て受け入れ、薬売りに期待の眼を向ける。
が、薬売りは持っていた箱を下ろして中からろうそくを取り出して灯しながら、こちらに目も向けずに淡々と答える。
「剣が、抜ければ、な。だが、剣を抜くにはモノノ怪の『形』と『真』と『理』が必要だ」
「とりあえず、今の所『形』は判明してますよね？」
「あぁ。人面魚ね。でも、何で病院で人面魚？」
薬売りの言葉に火鳥が答え、加世子も同意しつつ首を傾げる。
加世子の疑問の通り、襲われた時はそれどころではなかったが、今になって思うと病院に人面魚は脈絡がなさすぎる。
別にこの病院は、池などを埋立して建てたものではないし、海も近くない。
川ぐらいならあるが、それもすぐ隣に流れているというほど近くもなければ、大きな氾濫などの災害だってここ最近どころか十年単位で遡っても心当たりはない。
人面魚どころか魚にまつわる心当たりはサッパリなくて首を傾げる加世子に、薬売りは言った。
「『形』は、人面魚ではありません、ぜ」
「え？」
言いつつ、左腕を肩と水平になるように伸ばし、その袖の中から手品のようにするりと取り出したのは、火鳥の話の中にも出てきたモノノ怪を斬る為の剣。
さほど大きくない、脇差ほどの長さだが柄も鞘も豪華絢爛な装飾が施され、柄の先に赤鬼にも白い毛の猿にも見える頭がついた剣は、大きく口を開けている。
「モノノ怪の『形』。それは――『人魚』だ」
薬売りの言葉に応えるように、剣の頭は大きく開いた口を勢い良く閉ざして歯を鳴らす。
その動きと音に、加世子は話に聞いてはいたがやはり実物を目にしたら慄いてしまうが、同時に薬売りの言葉に疑問を抱いてしまう。
「に……人魚ぉ？　あれがぁ？」

「……そういえば、日本の人魚って姿絵ではあんな感じの人面魚ですよね」
加世子にとって「人魚」はアンデルセン童話の人魚姫がデフォルトイメージなので、夢を壊されたからか不満そうだが、火鳥の方は日本の人魚を知っていたらしく、やや遠い眼で納得した。
薬売りも最近の日本人にとってに人魚のイメージは加世子の方が普通だとわかっていたのか、加世子の不満そうな反応よりも火鳥の納得に少し意外そうな顔をして、「よく、知ってましたね」と呟いた。
その呟きに火鳥は少しだけ表情に陰りを落としたが、それでも彼女は答えた。
「……おばーちゃんの故郷に、人魚の伝説があったらしくて。それで……」
「……あっ!!」
火鳥の答えで思わず加世子が声を上げ、火鳥と薬売りから注目を浴びる。
その視線に気まずさを感じながら、加世子はすっかり忘れていたこと、聞き間違いだと思っていたこと、けれど現状を考えると真実だったと確信した、思い出した言葉を恐る恐る口にする。
「……ごめんなさい。あたし、聞き間違いかなんかだと思って、言ったら火鳥ちゃんを困らせるだけだと思って、そのまま今まで忘れてたんだけど……、火鳥ちゃんのおばーちゃん、富士野さんは意識を失う前に言ったの。
火鳥ちゃんを呼ばないでって。……人魚に殺されるから、呼ばないでって頼まれてたの」
加世子の言葉で火鳥は医療機器と蝋燭ぐらいしか光源の無い部屋の中でもわかる程に顔色を蒼白に変えた。
「ごめん！　ごめんなさい！　あたしが本気にしなかった所為で、富士野さんがあんなに必死になって頼んだのにあたしが……あたしが……」
加世子本人は富士野の言葉を思い出したことで、自分が避けられたはずのこの現状に火鳥を巻き込んだこと、死に瀕しても、孫娘に最期

に看取られることを望むよりも危ない目に遭わないで欲しいと、火鳥の身を案じた祖母の愛情を踏みにじったことに気付いてしまい、泣きそうな顔になりながら火鳥に謝り続ける。
しかし火鳥としては、加世子が祖母の言葉を真に受けなかったのは当たり前だと思っているし、何より自分が危険な目に遭うことよりも祖母を独りっきりで永眠させることの方が嫌だったので、加世子の判断に対して怒りや不満はまったくない為、「加世子さんは何も悪くないです！」と必死で謝る加世子をフォローする。
彼女が顔色を変えたのは、自分があの「人魚」に狙われているという情報ではない。
何故、祖母がそんなことをわかっていたのか。
その謎こそが、火鳥にとって最悪の可能性を想起させた。
薬売りはというと、口角をわずかに上げて視線をベッドに向ける。
人工呼吸器でか細い呼吸を何とか維持している、枯れ木のように痩せ細った老婆を見下して彼は言った。
火鳥が思い浮かべた最悪を口にする。
「……ほう。どうやら、このモノノ怪の心当たりがあるのは、こちらの御婦人か」
＊　＊　＊
薬売りの言葉に、火鳥に謝罪し続けていた加世子は思わず噛みつくように反論した。
「ま、待ってよ！　確かに言ってた事といい、富士野さんの故郷に伝わる話といい、富士野さんが何か関係してそうだけど、富士野さんはまだ生きているわよ！　モノノ怪なんてお化けになっちゃいないわよ！」
「……モノノ怪とは、死者のことじゃない」
加世子の反論で何か彼女は勘違いしていることに気付き、薬売りは淡々と訂正を入れる。
「へ？　そうなの？」
「……あの、薬売りさん。私も未だに『モノノ怪』がよくわかってないので、余裕があれば改めて教えて欲しいのですが」

薬売りの察した通り、「くびれ鬼」の話の所為でか加世子は「モノノ怪＝悪霊」くらいに思っていたらしく、薬売りの訂正で気勢が削がれて間の抜けた声を上げる。
そして火鳥自身も同じような解釈をしていたのか、おずおずと手を上げて「モノノ怪」についての説明を求めてきた。
薬売りは一度、目を伏せて深く息をついた。
それは今まで関わってきた相手にいちいちしてきた説明を、また一からしなくてはならないのが面倒だったからの溜息か。
それとも、遠い昔をふと思い出して懐かしんでいたのか。
それは、薬売りにしかわからない。
「……モノノ怪とは、人の情念や怨念が『アヤカシ』に取り憑いたものの
のこと。
あなた達が言う、幽霊や、妖怪、そういったものこそ『アヤカシ』。アヤカシは、人や獣や鳥がいるのと等しく、普(あまね)くいるものだ。ただそこにいるだけ、少し不思議なことをするだけの、無害なものもいれば、人に手助けをするものも、害をなすものいる。
だが、アヤカシにとっては、どれも同じ。アヤカシの道理は、人には通じない。アヤカシは、自分たちの道理で動くだけで、人の味方でも、敵でもない。
……だが、モノノ怪は、違う。
あれは、人に近すぎる」
そこまで語り、薬売りは一息をつく。
「モノノ怪」のことを「人に近すぎる」と語った薬売りは、憎々しげに吐き捨てるようにも見えたが、痛々しいものを見るように、何かに深く同情して、何かに嘆いているように、今にも泣きだしそうな顔で憐れんでいるようにも、火鳥には見えた。
しかしそう見えたのは眼の錯覚だと思わせるほど、薬売りの表情は瞬きする間もなくいつもの人形じみた、何を考えているかわからない美しい無表情に戻って、感情の見当たらない淡々とした口調で説明を続けた。
「……人の道理が通じぬものに、人としての理性を失った情念が取り

憑く。その情念が仮に、ただ生まれたかったという願い、想い慕う恋情といった、悪意などない善意や好意であっても、人には理解出来ぬアヤカシの道理と結びついてしまえば、歪み、形を変えて人に害なす魔羅の鬼と化す。

それが――――モノノ怪だ」

モノノ怪とはどういったものか。そして何故、斬らねばならないのかまでも言外に答えた薬売りに、火鳥は何かに耐えるようにスカートの裾を両手で握りしめ、尋ねた。

「……ねえ、薬売りさん。……今回の『人魚』は、おばーちゃんが生み出したものなんですか？」

前回の「くびれ鬼」で、薬売りや加世子から見たら背負う必要のない罪を背負って、傷つく必要などない、彼女も被害者だといえたのに「加害者」だと言って引かず、鬼に成り果てた友人を人に戻すために首をくくる覚悟をも決めた時と同じように、火鳥は問う。

その答え次第では、またしても自分の大切な人は人ではない何か、人の敵として切り払われることを理解していながら、悪あがきの時間稼ぎをしようとはせずに答えを求めた。

加世子の口から、「何言ってんのよ!?」「そんな訳ないじゃない！」という言葉が出かかったが、火鳥の今にも涙が溢れそうなうるんだ瞳でありながら、その涙を零そうとせずに堪える横顔の静謐さを前にしたら何も言えなくなる。

自分でも信じきれていないことなど叫んでも、それは慰めどころか彼女の覚悟を侮辱するだけだと思い知らされた。

火鳥の、わずか１４歳の少女が決めたあまりに痛々しい覚悟を湛えた眼と真正面から向き合う薬売りは、自身の翡翠のような眼を離さずに答える。

「……それは、まだわからない。

だが、そこの加世子さんと火鳥さんの話からして、無関係ではない事は確かだろう」

確証はないが、その可能性が高いと答える。今の段階ではそうとしか言えないのだから仕方はないのだろうが、はっきり肯定するよりも

かすかでわずか、無い方がましな可能性が捨てられない曖昧な言葉は酷く残酷だった。
真実しか語らない薬売りの言葉は残酷だった。
だけど、薬売り本人は――
「……薬売りさん、何を――」
火鳥は問う。
残酷な可能性を語りながら、薬売りは首から下げていた首飾りらしきものをベッドで眠り続ける富士野の胸の上に裏返しで置く。いや、どうやら裏だと思っていた面こそが裏だったのを、火鳥がスマホのライトで照らして理解する。
太陽らしき彫刻が施された掌ほどの丸い首飾りに思えたものは、鏡だった。
「……鏡は魔除けになりますから、ね。結界は張りましたが、万が一に備えて。この方は、自力で逃げることは出来ませんし」
薬売りの答えに、尋ねた火鳥と薬売りの残酷な答えに不満そうだった加世子はきょとんとした顔になる。
しばしの間をおいて、火鳥は笑った。
「ありがとうございます」
そのそっけないようで、細やかな気遣いに礼を言う。
強がりではない、本心からの喜びの笑みで。
ない方がマシと思える可能性を語ったのは、薬売り本人もそのわずかな可能性を信じている、信じていたい、手放したくないからこそだと火鳥には思えた。
＊　＊　＊
火鳥の礼に薬売りは特に何も応じず、死を待つしかない眠り続ける老婆を見下しながら何かを指示するように指を動かすと、箱の中から蛾のようなやじろべえのようなものが一つ飛び出し、薬売りの立てた人差し指の上にちょこんと乗る。
それは鈴を両端に垂らした天秤。モノノ怪との距離を測り、位置を把握するための道具。
その天秤が老婆ではなく逆側の病室の外に傾くのを確認してから、

薬売りは火鳥と加世子に視線を向けて言った。
「……とりあえず、彼女自身がモノノ怪に成り果てている訳では、なさそうですね」
天秤の反応と薬売りの言葉で、ひとまず最悪の可能性はないことが確定して火鳥と加世子がホッと安堵の息を吐いた。
しかし、事態は好転していない。これはこれで現状は最悪に近いことを薬売りだけではなく火鳥も加世子もわかっている。
薬売りの持つ剣を抜く為に必要なものは、「事の有り様」である「真」と、「心の有り様」である「理」。
そしてそれらを得るには、「モノノ怪」に関わる者からの話、情報が必要だ。
その情報を持っている可能性が極めて高い富士野は、医師ですら匙を投げた危篤の老人。
「お二方、何か少しでも……心当たりはありませんか？」
関係者らしき本人から話を聞くのは絶望的なので、薬売りは火鳥と加世子に向き直り、改めて尋ねる。
だが、加世子はもちろん火鳥も申し訳なさそうに首を横に振る。
「あたしはさっき言った通り、富士野さんから言われたこと以外には何も思い浮かばないわ。あんな人面魚な人魚に襲われる心当たりは、あたしが聞きたいくらいよ」
「ごめんなさい。今回は本当に、私の自責とか意地とかではなく真実、心当たりがないんです。あるとしたら、私もさっき話したおばーちゃんの故郷の話くらいですけど……、あれも関係あるのかどうか怪しいくらいですね」
「ほう。何故、そう思うのですか？」
火鳥が無関係ではないかと疑う、祖母の故郷に伝わる「人魚伝説」を薬売りが話すように促すので、火鳥は無関係と思えた根拠ごとシンプルに答えた。
「だって、正確に言えば人魚伝説ではなく、八百比丘尼（やおびくに）伝説ですから。あの伝承の主人公は八百比丘尼の方で、人魚は添え物でしょう？」
加世子は火鳥の答えに「やおびくに？」とオウム返しする。

そちらに気を取られて、火鳥は見ていなかった。
「八百比丘尼」と火鳥が言った瞬間、薬売りが驚いたように、そして何かに納得したように眼を見開いたことに気付かなかった。
「それ、人魚とどういう関係があるの？」
「八百比丘尼」について全く知らないらしい加世子が尋ねるので、火鳥が説明しようと口を開くがその前に薬売りが淡々と話し始める。
「……ある漁村で人魚が釣り上げられ、漁師たちはその人魚を捌いてふるまったが、釣り上げた現物を知る漁師たちは不気味がって結局口にはせず、奉納品として神社にささげた。
しかしその肉が人魚のものとは知らない娘は、あまりに美味そうな肉だったので、こっそり食べてしまう。
それ以来、その娘は歳を取らなくなった。何年たっても娘は人魚の肉を食べた当時、１０代半ばの姿で生きつづけ、家族や夫、親しい者と何度も死に別れことで世を儚んで尼となり、若狭で入定した時には齢（よわい）８００歳だったと言われている。
……地方によって細部は違いますが、大筋としてはだいたいこのような話です、よ。……ちなみに『入定』は仏教の用語で、『永遠に瞑想し続ける状態に入る』ことなので、本来なら死んだという意味ですが……もしかしたら八百比丘尼の場合は、そのままの意味かもしれません、ね」
加世子に説明しながら、薬売りが自分の方をじっと見ていることに火鳥は気付いて首を傾げた。
火鳥に不思議そうに首を傾げられても、薬売りは火鳥を見たまま「八百比丘尼」についてシンプルな答えを述べた。
「八百比丘尼とは……人魚の肉を食べたことで不老不死となった女性の事です、よ」

人魚：三の幕

火鳥を妙に注目して語る薬売りに、火鳥だけではなく加世子も不思議に思いつつ、話を進める。

「えっと……じゃあ、あの人魚を食べたら不老不死になれるってこと？」

「……さぁ？　おそらく、無理でしょうね。同じ名と形でも、世間一般で知られる『妖怪』としての有り様と、『モノノ怪』としての有り様とは、別物である場合が多いので」

永遠の若さに関しては正直いって惹かれるものがあるが、あの「人魚」のビジュアルといい、先ほどの薬売りの話といい、もちろん加世子は食べたいとは思わない。ただ話を整理するために質問してみたら、薬売りはそっけなく答えた。

「大概の場合、世間一般で知られる『妖怪』としての有り様は、『アヤカシ』のものであり、その『アヤカシ』に人の情念が取り憑き『モノノ怪』になるから、同じ名と形でも、有り様が歪み、変化するのだろう。

だが……おそらくこの『人魚』は、『アヤカシ』の人魚が変化したものではない」

加世子に「何で違いがあるの？」と訊かれる前に、優美な指先で自分のあごを撫でながら薬売りはアヤカシとモノノ怪で在り様が違う理由を語る。

加世子に説明しているというより、自分の考えを整理するための独り言だと認識しつつも、火鳥は薬売りの言葉で気づいた点を上げる。

「魚も海とか川も関係ない、病院に現れているからですか？」

「……その通り。元が人魚のアヤカシなら、魚か、水が関係している。いくら人の道理が通じないとはいえ、病院に現れる道理は、さすがにない。

海や川から誰かを追ってきたのならともかく……、そうではない、病院で生まれたモノノ怪なら、それは人魚のアヤカシが基ではなく、モノノ怪の有り様がアヤカシの人魚に似てしまったから、そのような

形になったのだろう」
　最初から疑問だった、「何故、病院の中に人魚？」という疑問が、「人魚のアヤカシが基ではない」という根拠に繋がる。
　薬売りはおそらく今回のパターンは、遠い昔に斬り払った「欄奈待（らんなたい）」という香木から生まれたモノノ怪である「鵺（ぬえ）」と同じものだと推測している。
　おそらく本来なら「付喪神（つくもがみ）」という物そのもののアヤカシだったはずの欄奈待だが、欄奈待には持っている者は天下人になれるという謂れがあった。
　その為、ただでさえ香木は興味がない者にとってはただの腐った木、香道に携わる者にとっては価値ある物という二面性があるのに加えて、香道に知識や興味がなくとも野心を持つ者にとって大きな意味と価値が付属したことで、「見る者によって姿が変わる」という有り様を得た。
　その在り様が、「虎の部分を見た者にとって鵺は虎、蛇の部分を見た者にとって鵺は蛇」という「鵺」というアヤカシの有り様と一致したため、「付喪神」だったアヤカシが「鵺」というモノノ怪の形を得るという珍妙な出来事が、「鵺」の顛末。
「病院という場所柄……、魚や水よりも『食べると不老不死になる』という部分が、『真』や『理』に関わっている方が自然、ですね」
　そのような実例を知っている為、薬売りは「人魚」という形から思い浮かぶイメージは無視して、病院という場所柄から関連性があるように思える人魚の特性に注目する。
　だが、火鳥は薬売りの考えに同意しつつもそれならそれで浮き彫りになる疑問を口にした。
「確かに、それならおばーちゃんだけじゃなくて病院の患者さん全体の『死にたくない』って願望そのものが『理』で説明がつくかもしれませんね。
　でも、『食べると不老不死になる』割には、むしろ人魚がこちらを食べようと襲い掛かってません？　モノノ怪の形が八百比丘尼の方でしたら、私たちを人魚に例えているってことで筋が通るのですが

……」
「そうよねー。富士野さんが言うには、火鳥ちゃんが狙われてるみたいだけど、その理由も謎のまんまだし……」
加世子も火鳥の疑問に同意しつつ、更に浮かんだ疑問であり心配事を口にすると、火鳥と同じ部分に引っかかりを覚えているのか、薬売りはやや険しい顔をしつつも加世子の疑問の答えは想像がついたので答えてくれた。
「いや……、別に火鳥さん個人をあれは狙っている訳ではない。
加世子さんにも、俺にも普通に、襲い掛かって来た。単純に、自分から一番近い者に襲い掛かっているだけだ」
「え？　じゃあ、何で富士野さんは火鳥ちゃんが殺されるなんて言ったの？」
薬売りの言う通り、よくよく思い返せば確かに人魚は加世子や薬売りを無視して、火鳥を執拗に優先的に襲っていた訳ではない。
人が水辺に寄ってきた時の鯉のように、ただただ意地汚く一番近くにいる者に食らいつこうとしていただけで、個人どころか性別の見分けがついているのかすら怪しいくらいだった。
しかしあの人魚の獲物が無差別ならば、それはそれで富士野の最期の懇願にまた別の謎が生まれるので、思わず加世子は反射的に訊き返した。
「それがわかれば、苦労しませんよ。……ただ、もしかしたら本当に、この方は無関係かもしれません、ね。
たまに、いるんですよ。アヤカシが見える、気配を感じられる、そして何の関係もないのにモノノ怪と関わってしまう、巡り合わせの悪いお人が。
特に、幼い子供や死期が近い者は、有り様がアヤカシに近いのか、その傾向がある。だから、この富士野という方も、意識を失う間際にあの『人魚』を見たからこそ、錯乱して、孫娘の身を案じたから、あなたに懇願したのかもしれません、ね」
別に火鳥の不安をフォローする意図はなかったのかもしれないが、祖母は無関係かもしれないという可能性が高まったことに、火鳥は少

し嬉しげに微笑んで「そうかもしれませんね」と同意してから、またしてもふと疑問が浮かんだので薬売りに尋ねてみた。
「薬売りさんの言う通りだとしたら、この人魚って普段から普通の人には見えないだけで、病院内を泳ぎ回っているんでしょうか？
　そうだとしたら私や加世子さんは、薬売りさんが言う『たまにいるアヤカシの気配を感じたり、関係ないのにモノノ怪と関わる人間』という条件に合ってしまったから、獲物認定されているだけでしょうか？」
「心当たりがないのなら、その可能性が高い。それと、時間も悪かった。
　アヤカシは闇を渡って『こちら側』に干渉する。モノノ怪も、それは同じ。よほど力が強く、自力で光を覆い隠せるようにならない限りは、夜という時間か、光が届かない地下や密室などといった、限られた場所に現れ、そこから自分の一部と化した、他の者には見えない、聞こえない、全てが終わってどのような形であれモノノ怪から解放されぬ限り、不干渉の空間に引きずり込まれる」
「闇を渡る」と、「モノノ怪の一部である周囲が気付けない、不干渉の空間に引きずり込まれる」という説明で、医療機器は稼働しているのに電気がつかない、他の医者や看護師の気配が全くないという現状に説明がつき、火鳥と加世子は納得する。
　くびれ鬼の時も、教師や部活などで残っていた生徒が通りかかってもおかしくなかったのに誰も現れなかったので、「自分の一部である空間を作り出す」は、モノノ怪としては基本の能力なのかもしれないと火鳥は思った。
「特に、あの人魚は光に弱いようだ。だから、灯りを手離すな。灯りがなければ、近くにいる者より優先して襲い掛かるはず」
「はい。……スマホのバッテリーもつかなぁ？」
「……あのー」
　ついでに薬売りがベッド脇のサイドテーブルに置いた蝋燭を指さして人魚対策の忠告をし、火鳥はスマホのバッテリー残量を心配するが、加世子はちょっと気まずげな様子で挙手して言った。

「今の薬売りさんの説明で、思い出した。
人魚の心当たりは無いけど、あたしたちの現状の心当たりはあるかも」
＊　＊　＊
心当たりを尋ねられて「ない」と答えながら、後で思い出すのは二度目なので加世子はこの上なく気まずい思いをしながら、「今回のは気づかなくて仕方ないでしょ」という思いをこめて、その心当たりについて話し始める。
「もしあたしの心当たりが正解なら、1年位前から被害は出てるけど死人は出てないわ。
それくらい前から、うちの病院で夜勤のナースとか、緊急手術患者の付き添いとか、病人・怪我人以外の人がしばらく姿が見えなくなったと思ったら、体調を崩して倒れてる所を発見っていうのがちょくちょくあるのよ。
姿が見えないって言っても、長くて3時間くらい？　急患とかでバタバタしている時とかにいつの間にかいなくなるから、具体的にいつからどれぐらい行方不明だったのかはわからないのよね。
それに体調不良も看護師なら過労、付添いなら心労が溜まって倒れたぐらいで済む程度だから、頻度の多さが気になってたけどよくある事ってみんなスルーして気にしてなかったのよ。
ぶっちゃけー、無人の病室からナースコールとか、半透明の人間が歩いてるのを見たとか、そういう心霊現象のテンプレっぽい事ならもっとしょっちゅう起こってるから、この程度は病院内の怪談としても噂になってなかったわ」
加世子のぶっちゃけた話に火鳥は若干引いたような苦笑を浮かべるが、薬売りは真面目な顔で質問を重ねる。
「……その、倒れた方は、人魚について何か、言ってましたか？」
「聞いてないから気付かなかったのよ。
付添いの人達には詳しい話なんか聞けないから知らないけど、看護師たちは『変な夢を見た気がする』くらいね。
あぁ、あと危篤の知らせを受けてやってきたご家族で、5歳の女の

子が同じように３０分ほど姿が見えなくなったと思ったら、高熱を出して廊下の片隅で倒れてたってのがあったわ」
　話していて加世子は今になって思えば引っかかる、事件とも言えないささやかだが確かな「異常」を思い出し、それについても正直に、思い出せるだけ全部語る。
「別に外傷とかはなかったし、３０分くらいなら退屈でその辺を探検してたけどたまたま見つからなかったで済む程度の時間だし、熱も夜中に連れ出された寝不足、子供だから免疫力が低い、何かピリピリしてる大人たちの雰囲気が怖かったっていう心労のトリプルコンボで風邪をこじらせただけだと皆思ってたけど……、高熱だから入院させることになったらあの子、過呼吸になるほど泣いて嫌がったのよ。
　お化けが出る、お化けに食べられるから嫌だって」
　病院嫌いの子供は珍しくない。そして「死」を理解しているとは言い難い子供でも、大人の言動からか、病院の独特な雰囲気からか、病院と死者を結びつけるのはさほど不自然ではない。
　だから、「お化けが出るから病院は嫌」と泣き叫ぶ子供を不自然には思わない。思わなかった。
　あの、人を喰らおうと襲い掛かる人魚が泳ぎ回るこの病院を知るまでは。
「……外傷はなく、死ぬほどではないが高熱を出す。……命を啜っているのか？　それが、人魚の『真』。『理』は病院の患者の『死にたくない』という願い……なのか？」
　加世子の話をただの偶然、無関係の怪談ではないと判断し、薬売りは剣にその話から考えられる「真」と「理」を語るが、剣は口を開ける事すらせず無反応。
「違う……みたいですね。でも、加世子さんの話が無関係だとは私も思えないのですが……。
　加世子さん、しつこくてすみませんが他にもっと何か……、その行方不明になって倒れて見つかった人たちと私たちに共通点とかありませんか？」
　剣の反応を見て火鳥は残念そうに呟いてから加世子にさらに問う

が、加世子はもう話せることは全部話したつもりなので、腕を組んだり頭を抱えたりして唸りながら情報をひねり出す。
「う～ん……う～ん……。あとは……せいぜい皆、若いってくらいね。倒れた看護師たちは皆２０代の新人がほとんどだし、看護師以外も３０代はいなかったと思うわ……」
しかし加世子の努力虚しく、その共通点は既に剣によって否定された「真」を強化させてしまうだけ。
若い者、生命力に満ち溢れているであろう者が積極的に狙われるのなら、薬売りが言った「死にたくないから命を啜っている」という仮定が一番筋が通るのだが、実は剣に訊くまでもなく火鳥が言ったようにこの「真」と「理」だと、「人魚」という形に矛盾している。
喰らうことで永遠の命を得たのは、人魚ではなく八百比丘尼の方だ。
いくら基が「人魚」とは本来全く別のアヤカシでも、「人魚」の形を得たのならむしろ基が人魚のアヤカシがモノノ怪になるより、「人魚」としての特性を持っているはずだ。
そしてここが水辺も魚も関係していない病院内であることからして、「不老不死」もしくは「命」という要素が、このアヤカシを「人魚」に変えた「真」と「理」である可能性は高い。
もちろん加世子の話は無関係で、薬売りの想像も外れており、この人魚は元からアヤカシの人魚がモノノ怪になったもので、水辺から特定の誰かを追ってここまで来た可能性もある。
しかしそうだとしたらこの人魚は、無差別に人を襲う類のモノノ怪ではなく、特定の人間を狙って襲うはずだ。それなら、この場の誰も「人魚」に心当たりがないの有り得ない。
火鳥か加世子が嘘をついていると疑わしい状況だが、薬売りはモノノ怪を斬るようになって気が遠くなるような年月を重ねてきた。その年月で得た経験則は伊達ではない。
嘘をついているかどうかくらい、一言二言話せばお見通しに出来るくらい彼の観察力は研ぎ澄まされている。
その経験則、観察力から見ても、火鳥も加世子も嘘はついていない。

火鳥はくびれ鬼の件があるので、他人である加世子を巻き込んでいるのなら心当たりがあれば絶対に話す。
自己保身で隠し事など出来ないからこそ面倒事を生む性格だと薬売りは知っているので、彼女の言動に関しては何も疑っていない。
加世子は本日が初対面だが、こちらも嘘がつける人物ではないと見ている。
彼女によく似た女性を二人、薬売りは知っている。その内の一人は、軽薄な所があったが他者を思いやれる勇敢な女性で、外見だけではなく性格も加世子によく似ているように思えた。
もう一人は嘘つきだったが、根から腐っているとは言えない人だった。
一人目以上に浅慮だっただけで、自分のしたことがもたらした結果を知れば、罪を認めて反省することが出来る人であり、そもそも今と同じような異常な状況に陥っても、自分より年下の子供を気遣うことが出来る人だった。
根拠と言うには自分の、「そうであってほしい」という青臭い期待が多大なのは自覚している。
が、その個人の感情を切り捨てても、やはり彼女達の反応は嘘をついている者の反応ではない。心当たりがあって、それを知られたくないから嘘をついているのなら、沈黙を守り続けるかもっと嘘を重ねて真実から遠ざけようとするかが自然なので、この半端な情報量が彼女たちは無関係の証明となる。
ならば、やはり鍵はこの死にかけの老婆なのか？　とでも思っているのか、女性のように優美な指先で自分の唇を思案するように撫でながら、富士野という老婆を薬売りが見下ろしていた時、鈴の音が響いた。
＊　＊　＊
薬売りだけではなく、彼と同じようなことを思って痛ましげに、不安そうに富士野を見ていた加世子と火鳥も、まずは鈴の音の出所に注目してからすぐさま顔の向きごと視線を移す。
天秤から、札で封じられた病室の出入り口である扉に。

元々そちらに傾いていた天秤だが、あまり近くにいないのか浅い傾きで音が鳴らぬ程度に小さく揺れ続けていたのに、鈴の音が大きく響くほどに深く傾いたのは、間違いなく人魚が籠城する獲物に痺れを切らして集まって来たから。
そう、３人とも思った。
だが、扉の向こうから聞こえた「声」が一致していた３人の考えを分断させる。
「……開けて。……助けて」
「!?」
扉の向こうから弱々しい子供の声が、助けを求める子供の声が聞こえ、火鳥と加世子は同時に目を見開いてとっさに扉に向かって駆け出した。
「待て！　開けるな！　罠だ!!」
しかし一番薬売りの傍にいた火鳥は、彼に肩を掴まれて扉に向かうのを阻まれ、加世子も札を破って扉を開ける前に薬売りの制止が耳に届き、スライド式の扉の取っ手に手を掛ける体勢でひとまず振り向く。
が、薬売りの声は向こうにも聞こえていたのか、扉を激しく叩く音や衝撃と同時に、弱々しかった声は狂乱の叫びに変わる。
!?　何で!?　開けて開けて開けて!!　お願い助けて！
お化けが、魚のお化けがいるの!!　助けて！　お願い助けて!!」
あまりに悲痛な助けを求める声と、扉を壊す勢いで叩く音に加世子は暗闇でもわかる程に顔色を蒼白にさせて薬売りに尋ねる。
「こ、これ、本当に罠なの!?　あたしたちと同じように巻き込まれた子供じゃないの!?」
「……天秤が、そこにモノノ怪がいることを表している」
「子供が襲われてるのなら、いるのは当たり前ですよ！
薬売りさん！　本当にこの声は、扉を開けさせる為の罠なんですが!?　万が一にも本当に子供って可能性はないんですか!?」
加世子の縋るように、子供を見捨てる罪悪感など背負わなくていい確証が欲しくて薬売りに尋ねるが、薬売りが「罠」と言い張る根拠は

薄い。
薬売りは経験則でこれが9割がた罠であると確信しているが、加世子や火鳥にこの悲痛な子供の叫喚を無視しろというのは酷である事もわかっている。
そして何より、薬売りでも1割程度だが本当に火鳥や加世子と同じく、運悪く人魚の獲物認定された子供の可能性があると思っているし、その可能性を捨てる事も出来ない。
天秤はモノノ怪との距離を測り、位置を知り、場合によっては手繰り寄せることもできるが、そこにいるのが人間かモノノ怪かの区別はつかない。火鳥の言う通り、襲われている最中ならば本物の子供と一緒に人魚がいるのだから、天秤が反応するのは当然だ。
「痛い！　痛いよぉぉっっ！　お願い！　助けて！　開けて!!
お母さん！　お母さぁぁぁぁん!!　助けて！　助けてぇぇぇぇっっ!!」
薬売りは火鳥の問いに答えられない。子供を案じる彼女達の不安を消してやる根拠を見つけられず、逆に扉の向こうからはさらに彼女たちの良心を、罪悪感を煽る悲鳴が上がる。
扉のすぐ傍にいる加世子には、悲鳴だけではなく何かを噛みしめる、くちゃくちゃと咀嚼する音も聞こえたのだろう。
だから、その行動を浅はかと言って謗るのは鬼畜の所業。
「!!　っっっごめん、二人とも!!　薬売りさん！　火鳥ちゃんだけでも守ってあげて!!」
「加世子さん!!」
頭では加世子も薬売りと同じく9割がた罠だとわかっていた。それでも、放っておくことは出来なかった。
例え、あの人魚に襲われても命に別状どころか現実に外傷はなく、ちょっと風邪をこじらせたくらいの高熱が出てしばらく寝込む程度の被害であったとしても、例え後になれば「怖い夢だった」で済む記憶になるとしても、それでも生きながらに人の顔をした魚に襲われ、貪り食われる体験などさせたくない。
何の非もないのに化け物に襲われ、心に酷い傷を負うであろう子供

がいるかもしれない。その可能性が捨てられないのなら、加世子は見捨てることなど出来なかった。
だから謝りながら、せめて富士野が自分に懇願した最期の願いを薬売りに託して、力任せに扉に貼りついていた札を破って戸を開けた。
開けながらも、「光に弱い」という情報は忘れていなかったから加世子はペンライトを真っ先に廊下に向ける。
その行動が正解だったのかどうかは、加世子にはわからない。
開けた瞬間、襲われるという事態にならなかった点では正解だ。だがその代わりに加世子は暗闇というオブラート抜きで、見てしまう。

『騙された』

人面魚としか思えない、目どころか鼻の穴も塞いでしまいそうなほど浮腫んだ丸い顔の魚が空中で身をくねらせて揺蕩い、真っ赤な口内と並びも色も悪い歯をむき出しにして嗤う。
やはり、罠だった。
廊下には大群と言える、数十もの数の人魚が待ちかねていた。
けれどそれはまだ、想像の範疇。それだけなら襲われる前に、ペンライトの光に怯んでいる隙にまたすぐ扉を閉めることも叶ったかもしれない。
ペンライトの灯りで、加世子は誤魔化しようもなく見てしまったもの。それは、自分を騙すためにリアリティを出す為だったのか、それとも獲物が籠城してしまって喰らい損ね、飢えが限界だったからこその蛮行か。
廊下に転がる、人面魚の残骸。
空中を泳ぐ人魚たちの口を染め赤黒い液体の正体、歯に絡まって垂れさがる黒い糸のようなものが何であるか、ここで、扉の向こうで何をしていたのか、自分の聞いていた音が何であるかを加世子は理解してしまった。

「きゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁっっっっ!!」
自分たちを騙す為の罠を張り、演技が出来るほどの知性を持ちながら、共食いというケダモノ以下の行動を取った人魚の悍ましさに、加世子は理性で理解してしまったからこそ恐怖が理性を、理知を塗りつぶしてペンライトを落とし、扉を閉める事も出来ずに悲鳴を上げた。
薬売りは舌打ちしつつも、火鳥を後ろに、少しでも人魚から遠ざける為に突き飛ばすようにして下がらせてから、鞘が抜けぬ剣を手にして駆けつけ、自分たちの仲間を喰らった口を開けて襲い掛かる人魚から加世子を庇い打ち払って追い払う。
だが数が多すぎるのと、加世子は見たものの衝撃が強すぎて薬売りの腕の中で庇われて抱かれたまま、動けない。自分から彼の後ろに回って逃げるなり、扉を閉めるなりの行動が取れずにいる。
薬売りも忠告を破ったとはいえ、それは弱者を思いやる慈愛ゆえの行動だからこそ加世子を見捨てる事が出来ず、あまりに危うげな防戦に強いられる。
光に弱いことはわかっているが、自分が光源にしていたのは火がむき出しの蝋燭だったので、もちろん今は手元にない。富士野のベッド脇にあるサイドテーブルの上に置きっぱなしだ。
加世子の落としたペンライトを拾う隙はなく、薬売りが使える手段は限られている。
けれど、その手段は使う訳にはいかない。絶対に使わないと決めている。
「加世子さん！　薬売りさん!!」
だが、薬売りの決意などこの女は知らない。
いつも、いつだって彼女は悪意はなく、善意のつもりだってなく、ただ呼吸をするように、当たり前のことのように行動する。
「！　この阿呆が！」
だから、薬売りは思わず感情をむき出しにして怒鳴った。
自分たちに、自分と加世子を襲う人魚に向かって投げつけられた、光量を最大にしたスマートフォンがそれほど今は憎かった。
自分たちを助ける為に、鳥目の癖に、それを失くせば何も見えなく

なってしまう癖に、自分の身を守る「光」を薬売りと加世子を守る為に人魚に向かって投げつけた、底抜けのお人好しに怒りの言葉をぶつける。

「逃げろ!!」

光に一瞬怯みながらも、一番美味そうな獲物が一番無防備になった事を喜ぶ人魚の醜悪な笑みを浮かべて、彼女の元へ向かう人魚の群れを打ち払おうと足掻きながら。

また、何度も何度も繰り返した失敗を悔やむように顔を歪めながら。

人魚：四の幕

人魚から少しでも遠ざける為に、薬売りは火鳥をとっさに後ろに突き飛ばしたが、火がむき出しの蝋燭を置いてある富士野のベットの頭側ではなく足元側に突き飛ばしていた。

これはとっさでも突き飛ばした際に蝋燭を倒して火を消してしまわぬように、その火で火鳥や富士野が火傷を負わぬようにという配慮だったが、薬売りの配慮は最悪の裏目に出る。

蝋燭程度の光源では、ベッドの足元側にいる火鳥は照らせない。

薬売りと加世子がいる位置、病室の出入り口は火鳥の位置から対角線上だというのもあって、懐中電灯代わりにしていたスマホを手離した火鳥は今、一番光が届かない暗い場所に一人でいる。

「火鳥ちゃん!?」

投げつけられたものが何であるかに気付いた加世子の、恐怖で真っ白になっていた思考が蘇る。硬直していた体が、あれほど恐れて気味悪がっていた人魚たちに手を伸ばす。

しかし数の多さと勢い、そして魚特有のぬめりの所為で一匹たりとも捕まえられない。

薬売りも鞘がついたままの退魔の剣で人魚を何匹か打ち払うが、焼け石に水でしかない。

人魚たちは自分たちの仲間が剣で殴り落とされようが、勢いは緩めず加世子も薬売りも無視して一直線に襲い掛かる。

「っっっ!!」

闇の中、人影が魚影にたかられて蹲る。

悲鳴は上がらない。耐えるような、くぐもったうめき声すらも、ビチビチと人魚同士がぶつかりあって跳ねる音に掻き消される。

「火鳥さん!!」

薬売りが犬歯をむき出しにして叫んだ。怒鳴ったと言った方が正確な程、怒りを含んだ声で思わず加世子の身が竦む。

実際、薬売りの声は彼女の身を案じたものではない。

わかっているから。

彼女がスマホを投げつけたのは、善意のつもりですらなくとっさの反射のようなものであったことくらい。
鳥目とはいえ、光源があるのだからその光源の方向に、祖母の枕元にまで移動するくらいスマホを投げつけた後でも出来たはずなのにしなかったのは、とっさに行動してから恐怖で硬直した訳ではない事も、わかっている。
祖母に被害が行かないように、薬売りや加世子を人魚の気から逸らせる為に、彼女はわざと一番暗いあの位置から動かなかった。
自分を囮にして、犠牲にして、守ろうとしている。
これだって、善意のつもりもない。自己満足でしている事だとすら、今は思っていない。
意図的に動かなかったくせに、スマホを投げつけた時と同じく、呼吸と同じくらい「当たり前」のことだと思ってしているのを薬売りは知っている。
悲鳴を上げないのだって今更になって、自分のしている事は相手に心配をかけて悲しませていることに気付いたから、だからせめて少しでもその心配を和らげようと思って耐えている事すら、わかっている。
いつも、いつだってそうだから。
悲鳴すら上げないのは余計に周りを心配させていることを全くわかっていない、そんな気遣いは無駄であることを学習しない阿呆である事を、薬売りは知っている。
ずっとずっと昔から、薬売りは知っていた。
何度も何度も、彼女がそういう阿呆だということを思い知らされてきたのに、またしてもその阿呆なことをしでかした火鳥が腹立たしくて、わかっていたのにまた火鳥がやらかすのを止められなかった自分が許せないまま、火鳥が投げつけたスマホを拾い、その光を魚影にたかられ、生きながらに貪り食われている愚か者に向けた。
いや、向ける前にそれは起こった。
『!?』
突如、辺りを白く染めて薬売りや加世子の眼も眩ませるほどの輝き

が放たれる。
光源は、富士野の胸元。
薬売りが「気休め」と言って置いた鏡が、カメラのフラッシュ並の光を放つ。
人魚の跳ねる音に掻き消されることなく、火鳥の「心配しないで」という思いで耐えた苦痛の声を聞き逃さない者がいた。
自分が死の淵に瀕しても、案じたのは彼女の事だったから。
だから、例え動けなくても、動くことすらできないからこそ、残りわずかな命をさらに縮めるような行いであっても躊躇などなかった。
誰もが理屈抜きで、理解出来た。
その輝きは、富士野の命そのものであることを。

＊　＊　＊

『恐ろしい。恐ろしい……』
影すら生まない、辺りを白で埋め尽くす光の中で声を聞いた。
じゃらじゃらと何かを擦り合わせる音と一緒に、彼女は言う。
『あんなの……まるで八百比丘尼（やおびくに）じゃ……。あれはまるで、人魚の肉じゃ……。
恐ろしい……、恐ろしい……。ああなることをわかってて、あんなものを与えるなんて……。人の所業じゃないわい……』
何かを恐れ、彼女は、老婆は、富士野はひたすらに数珠を擦り合わせて一心不乱に祈っていた。
『嫌じゃ……。嫌じゃ……。わしは自然に、天寿を全うして死にたい。
嫌じゃ……、嫌じゃ……。あのような死ねぬ体に、死んどらんのに生きてもおらん体になどなりとうない……。八百比丘尼になど、なりとうない……』
光が薄れるのに比例して、その声は遠くなって消えてゆく。
最後に聞こえたのは、か細く絞り出すような切願。
『――――独りきりで生きるのも、死ぬのも嫌じゃ』

＊　＊　＊

「火鳥ちゃん！　火鳥ちゃん!!」
「う……うぅん……」
加世子に揺り起こされて、ぐったりしていた火鳥が目を開ける。
しばし寝ぼけたようにぼんやりしていた顔だったが、気を失う直前の出来事を思い出したのか、急に眼を見開いてあたりを見渡す。
「!?　え?　人魚は!?　っていうか、何で電気がついてるんですか!?
あと何で私はこんなぐっしょり濡れてるの!?　なんかやたらとベタベタするんですけどこれ！」
火鳥のパニック具合に、加世子はひとまず元気そうである事に安堵しつつ苦笑した。
パニックになっていながらも、火鳥は周りをよく見ている。彼女の言う通り、モノノ怪の所為で停電状態だった病室や廊下の電灯は復活しており、あれほど大量だった人魚も一匹残らずいなくなっている。
安堵すべき状況であるはずだが、つい先ほどまでがヤバすぎる状況だったので火鳥はまた罠か何かと身構えつつ、自分の全身にまとわりつくベタベタした液体を気味悪そうに悪あがきで拭い取りながら加世子に尋ねるのだが、加世子も答えようがなく、助けを求めるように視線を傍らの人物に向ける。
「最後のは、自業自得だ」
パニックを起こす火鳥を見下しながら、薬売りは吐き捨てるように最後の問いにだけ答えた。
薬売りを見上げる火鳥は、彼の顔を見て一瞬でパニックが納まったが同時に固まる。
相変わらず奇抜な化粧でも損なわない美貌だが、その端正な顔はいつもの何を考えているかさっぱりわからない無表情ではなかった。
腕を組んだ仁王立ちで火鳥を見下す薬売りは、明らかに怒っていた。
表情こそは眉間に皺がわずかに寄っている程度なのだが、翡翠のような瞳は明らかに灼熱の怒りを灯しているのを感じ取り、思わず火鳥

はその場に正座して背筋を伸ばす。
「あ、あの！　薬売りさん、ごめんなっ!?」
「うわぁ……」
背筋を伸ばした正座から前に手をついて土下座の体勢に移行する前に、薬売りの拳が火鳥の赤っぽい頭に勢いよく落ちて、思わず加世子も自分の頭を押さえて同情の声を上げるほど痛そうな音がした。
実際に相当痛かったのか、火鳥はそれ以上謝罪の言葉すら紡げずに悶絶するのだが、そんなのお構いなしに薬売りは火鳥を見下して睨み付けながら語り始める。
「あんたは、本当に阿呆だな。
悪気はもちろん、善意のつもりですらない。完全な反射な分、余計に性質が悪い。阿呆なら阿呆なりに学習しろ」
「ちょっ！　薬売りさん、言い過ぎ！　火鳥ちゃんはあたしたちを助けようと……」
「い、いいんです……、加世子さん」
火鳥の行動に対して容赦ない非難に、思わず加世子が庇おうと口を挟むが、ボロクソに言われている本人が拳骨の痛みで涙目涙声のまま加世子を止める。
「薬売りさんの言う通りです……。私は考え無しの自己満足で皆さんに心配を掛けたのだから、怒られて当然です。薬売りさんの言う通り、私は学習能力のない阿呆ですよ。
だから……ごめんなさい薬売りさん。結局、迷惑をかけちゃって」
自分を庇う加世子を宥め、薬売りの言葉を全面的に認めて火鳥は再び土下座と言うほど深くは下げてないが、それに近い体勢で頭を下げてせめて誠実に反省を示す。
それも冷ややかな目で見降ろしていた薬売りは、一度ため息をついてからその場に膝をついてしゃがみこんでいる火鳥と視線を合わす。
そして、躊躇なく火鳥の柔らかな頬を右手でねじりあげた。
「!?　痛い痛い痛い！　薬売りさん、まだ怒ってるの!?」
「ちょっ！　女の子に何してんのよ、あんたは!!」
さすがに素直に反省して謝罪しているのだから、もう鉄拳制裁をす

ることはないと思っていた所で地味に拳骨より酷い攻撃を仕掛けて来て、思わず火鳥は悲鳴を上げて、加世子も薬売りの腕にチョップを決めて叩き落としてから怒鳴った。
が、薬売りは加世子を無視して火鳥に呆れているようなややジト目になって語りかける。
「怒ってますよ。本当に、学習しないあんたに、な。
……あんたは何にもわかっちゃいない。俺が怒っているのは、あんたが余計なことをしたからでも、それが迷惑だったからでもない。あんたが、自分の命を軽く見て、大事にしないからだ。
他人に心配を掛けたことを申し訳なく思う癖に、あんたはいつも、いつだって自分を自然に蔑ろにする。他人に迷惑をかけない行動は学習するくせに、自分を大事にしようという発想は、いつまでたっても生まれやしない。
いい加減にしろ。あんたが自分を蔑ろにするということは、あんたを大切に思う相手の気持ちも、踏みにじっていることに気付け」
そこまで言って、薬売りは指さした。
ベッドの上でまだかろうじて心電図が動いているが、人工呼吸器をつけていても息をしているのかどうかもうわからぬほど弱りきった、死が近づいた富士野を。
「人魚に襲われていた火鳥さんから、人魚を追い払ったのも、人魚によって閉じられていたこの場が現実に帰ったのも、この人のおかげだ。
文字通り、命の残り火をほとんど使い果たして、モノノ怪が伝って来る闇を払ったんだ」
立ち上がって語る薬売りの言葉に、つねられた頬を押さえてまだ涙目になっていた火鳥が眼を見開いて固まる。
人魚に襲われながらも、気を失う間際に見た光を思い出したのか、火鳥の顔色から血の気が引いていゆく。
「あんたが、自分の命なんて他の誰かと比べたら軽いものだと思えば、あんたの為に命の残り火を文字通り使い果たして、あんたを守ろうとした人の思いも、覚悟も、その結果も軽いものになる。

火鳥さん、あんたにとって自分のばあさんの命はその程度の……

「違います!!」

ようやく、薬売りの言いたかったこと、自分が何に対して怒っていたのかを理解した火鳥にトドメを刺すように続けた言葉だが、火鳥は途中で遮って否定した。

「違う!　私はこんなことの為に、バカやった私の為なんかにおばーちゃんの命を使って欲しくなかった!!

私は、おばーちゃんに少しでも長く生きて欲しかったから……だから……でも……それこそがとてつもなくバカなことだったんですね」

自己評価が極端に低い訳でも、自殺願望がある訳ではないので自覚できなかった、己の愚かさ。

心配をかけたくないと思いながらも、自分を軽んじていたことがどれほど自分の大切な人たちの心を痛め、その人たちがくれた思いを蔑ろにして踏みにじって来たかを理解した火鳥の声はどんどん弱々しくなる。

それでも、俯いて涙を一粒だけ零しながら彼女は言った。

「――――バカなことをして、ごめんなさい」

先ほどまでの反省も本物だが、あれは「次はあなた達に自分を犠牲にしている所を気付かせない」という意味合いで学習しようとしていた。

結局、自分を大切にしようとしていなかったから薬売りは全く自分を許さなかった、余計に怒った事を理解して、火鳥は再び謝罪して、自分がこれからすべきことを告げる。

「……私は多分、同じ様な状況になったらあのまま灯りを手離さずに動かないっていうのは出来ません。例えそれが、一番誰にも迷惑をかけずに済むとわかっていても。

けど、今度からはちゃんと自分のことも考えます。自分のことが考えられなくても、……おばーちゃんやいつきさんのことを思い出して、自分から襲われに行くようなことだけはしません」

バカ正直にお人好し具合は直らない事を告げながら、それでも自分

なりに自分を大事にしよう、自分のことをどうしても大事に出来ないのなら、自分のことを思ってくれた人の事を思い出すと語る火鳥に、薬売りはもう一度だけ息を吐く。
「……わかってくれたのなら、いいですよ。
ただ、今度こそは学習したそれを、忘れないでください、ね」
呆れているような、期待などしていないような素っ気ない言葉だった。
ただ、火鳥の赤っぽい髪を撫でる手は優しかったから、ようやく火鳥は安堵したように笑って顔を上げた。
しかし顔を上げてすぐに可愛らしいくしゃみを3回ほど連続で起こし、加世子は火鳥が人魚にたかられた所為で魚の体液らしきものでぐっしょり全身が濡れていることを思い出し、慌てて現実に戻った病院の廊下を走ってタオルを取りに行ってくれた。
「うぅ……。怪我がないのは幸いですけど、ただの水じゃなくてベトベトで気持ち悪い……」
「……加世子さんの話では、他の犠牲者は怪我もなく、熱を出して、倒れてただけだったな。
ということは、これはあの光で溶けた、人魚そのものかもしれない」
「その情報、知りたくなかった!!」
高熱が出るほどの被害は受けなかったが、ある意味それ以上に嫌な被害に遭った火鳥に、薬売りはしれっと更にげんなりする仮説を口にして、さすがに火鳥は軽くキレた。
薬売りの方も自業自得と言いつつも、自分たちを助ける為に人魚に襲われた挙句、人魚の体液塗れには同情しているのか、「そう怒るな」と言って頭に巻いていた手拭いを解き、火鳥の顔を拭ってやった。
元々、他者に対しての怒りが持続しない火鳥はそれで呆気ないくらいに怒りは消え、薬売りに拭ってもらいながらふと思い出した疑問を口にする。
「ところで、薬売りさん。人魚はいいんですか？　私たちは助かりましたけど、まだ『真』も『理』もわかってないから解決してませんよね？」

「……そうだな。だが、少し進展はあった」
答えながら、思い出す。
火鳥の質問や加世子の様子からして、富士野の命の輝きから自分だけが見えたであろう彼女の記憶の断片。
人魚と、八百比丘尼に対する恐れ。
やはり富士野は無関係ではなかったこと、それを火鳥に告げなくてはならない事に思う事がない訳ではないが、それは躊躇う理由にはなりはしない。
だから、「進展？」とオウム返しをしながら小首を傾げる火鳥に尋ねる。
富士野が「何」を人魚と八百比丘尼に例えていたか。その心当たりを尋ねるつもりだった。
しかし、口を開く前に薬売りの眼が見開き、そのまま火鳥と向き合ったまま動かなくなる。
「？　薬売りさん？」
呼びかけられても、薬売りは反応しない。火鳥と向き合っていながら、彼女を見ていない。声が聞こえていない。
その証拠に、彼は火鳥の声を無視していきなり行動に移す。
火鳥の未だ人魚の体液にまみれている手を取り、それを自分の口元に持って行った挙句に意外と肉厚な舌でベロリとその体液を舐め取った。
薬売りの行動に、今度は火鳥がまたしても「ぽ？」と鳩のような珍妙な声を上げて、そのまま石化したように固まってしまう。
だが火鳥を石化させても薬売りは、自分の口の中で舐め取った人魚の体液の味を確認しながら、火鳥の顔を拭った手ぬぐいも同じく確認するように匂いを嗅ぐ。
そして、そのどちらにも共通する感想を呟いた。
「……甘い」
匂いも、体液の味そのものも、蜂蜜のように甘い。
ベタベタするのは糖分の所為だろう。今の火鳥は濃い砂糖水を頭から被ったような状態である事に気付いた薬売りは、そのまま石化し

た火鳥から手を離し放っておいて一人でブツブツ何かを呟き続ける。
「甘い匂いと……体液。……八百比丘尼と、人魚の肉。そして……病院。……死にたくないのではなく、生かされたくないという……恐怖。
……なるほど。だから、アヤカシの人魚から生まれた訳ではないあの『人魚（モノノ怪）』は、人の命を奪い、啜っていたのか。それが、『真』と『理』か」
「火鳥ちゃん、タオル持って来たわよ！
って、どうしたの火鳥ちゃん!?　薬売りさん、何かした!?」
もう既に薬売りはそこにいないのに、薬売りに手を口元に持って行かれた体勢のまま赤い顔で固まっている火鳥を発見して、タオルを抱えたまま加世子が薬売りを問い詰めるが、薬売りは火鳥石化の原因が自分だという自覚すらないのか、加世子の質問もまだ固まっている火鳥もスルーして、逆に自分が知りたいことを尋ねる。

富士野と面識がある、そしてある特定の病気の重篤患者が入院している病室を薬売りは尋ねた。

＊　＊　＊

格好や職業こそは時代錯誤も過ぎるのだが、薬売りの常識や知識は和装が当たり前の時代から止まっている訳ではない。
売っている薬は漢方薬の類なので、西洋薬や外科関連の知識はさほどないだろうが、そこらの素人よりはマシと言い切れる程度にはある。
「現代病」の類を何も知らない訳ではない。
だから、「甘い匂いと体液」ですぐに連想は出来た。
「こんばんは」
がらりとスライド式の扉を躊躇なく開いて中に入り、薬売りは挨拶するのだが、病室の住人は何も答えない。
ギリギリとはいえまだ消灯の時間ではないはずなのに病室の電気を点いておらず、患者もベッドに横たわっているので眠っているから

気付いていないのかしれない。
起きていても反応などしようがないのかすら、わからない。
起きていたって、どうせ変わらない。患者はこの奇妙奇抜な男を現実か夢の住人かの区別はつかないし、そもそもその姿さえも見えていないだろう。
その身は、体中の体液という体液が甘やかな蜜になる程、本来なら生命力そのものであったものが毒となって、全身を侵している。
２型糖尿病の重篤患者。
複数の合併症も発症しており、その所為で視力は失われている。肥満の影響もあって両足を切断されて動くこともままならないし、足を失ったショックからか、動けなくなった事で脳が刺激を受けることもなくなったからか、入院した頃には既に発症していたアルツハイマーも悪化して、自分の名前さえも患者はもうわからない。
富士野と同じく死を待つだけの、富士野より酷い状態で寝たきりな患者に薬売りは、高下駄の足音を床に高く響かせながら歩み寄り、嫣然と笑った。
「……加世子さんから、聞きましたよ。あんたは、富士野さんと同じ老人ホームから、持病が悪化して、１年ほど前に入院した、と。
……入院してからも、する前からも、医者から止められていたにもかかわらず、食事制限を無視して、好きなものを隠れて食べていたとも。……ご自分の、ご家族が用意してくれた、差し入れの菓子類を、ね」
電気がついていない、闇がわだかまる病室で全長３０㎝はゆうにある魚が身をくねらせて泳いでいる。
人の顔をした、水死体のようにも……その病室の患者にも似ている、浮腫んだ顔の人魚が一匹、薬売りを無視して患者の口元に近づく。
そしてそのまま、患者の口の中に無理やり頭から入り込む。
患者が息苦しそうにえづいても無視して、むしろ周りを泳ぐ人魚たちはその苦しむ様を実に楽しそうに嗤って眺め、口の中に入り込む人魚もわざと苦しめているかのように派手に身をくねらせながら喉の奥へと潜り込み、突き進む。

自らを食わせる人魚と、苦しみながらそれを喰らう患者を、薬売りは艶やかな笑みを浮かべたまま見下ろし、語る。
「人魚にしては行動がおかしいのは、俺達は途中までしか見ていなかったから。この『人魚』の行動の本質……『真』は、他者を襲い、命を奪ってからが、本番だ。
元が人魚と何ら関係のないアヤカシが、人の情念や怨念に憑かれ、変質し、『人魚』というモノノ怪の形を得た。本物と違ってこの『人魚』自体に、あんたの寿命を延ばす術など、ない。
だから、他者を襲って命を啜り、奪った命をあんたに食わせて、延命し続けた。あんた好みの、甘美な肉として、食わせ続けた。
それが――――『真』」
形が「人魚」ならばおかしいと思っていた部分を説明する。
それこそがこのモノノ怪の「事の有り様」を表していたから、薬売りが無造作に下げた右手に握られている剣の頭が肯定するようにカチンと歯を鳴らす。
「あんたは死にたくなかったが、その為に何かを我慢する気もなかった。
死にたくないのに、あんたにとっては毒である甘味を欲した。人魚が若者を狙うのは、生命力豊かというだけではなく、あんたの嫉妬もある。それが『理』……だと思っていたが、どうやらこれは、少し、違うようです、ね」
そしてそのまま「心の有り様」である「理」を告げるかと思えば、薬売りは自分で自分の解釈を撤回する。
彼の言葉を、ゆらゆらそこらに揺蕩いながらニヤニヤ笑って聞いていた人魚たちから、醜悪な笑みが消えた。
『人魚』どもが叶えている願いは、上辺だけ。現に、あんたはもう動くことすらままならぬ体と、苦痛以外をもう何も、覚えていないし、考えることも出来ない頭だ。
あんたの、死にたくないが我慢もしたくないという望みは叶わず、むしろ生き地獄に縛り付けられている」
この病室を開けるまで、あの自ら患者にその身を食わせる人魚の、

仲間が食われているのを見ている他の人魚たちの顔を見るまで2択だった可能性は、人魚たちの笑みが決め手となって薬売りに確信を与えた。

「人魚たちがあんたを生かしているのは、あんたが望んだからじゃない。『人魚』というモノノ怪を生み出したのは、あんたじゃない。……この『人魚』を生み出したのは、あんたを八百比丘尼にして、生き地獄に括り付け、甚振り続けているのは……言葉と体、両方の暴力で痛めつけ、逆らえないように縛り付け続けた、あんたの家族とその怨念だ」

人魚：大詰め

「人魚」というモノノ怪を生み出したのは、死にたくないと願う死にかけの人間ではなく、その人間を殺すのも生ぬるいと思うほど憎む者……、家族だと薬売りは断言した。

薬売りの指摘に、人魚たちの顔が変質する。

無理やり自分たちを食わせて、他者から奪った命を与えはするが病を癒しはしなかった、苦しみが長引くように生かし続けた人魚たちの顔は水死体のように膨れ上がっていた。

人魚という存在から浮腫んだ顔は水死体を連想したが、そこの患者と見比べたら一目でわかる。あれは水死体の顔ではなく、肥満と腎臓の機能低下による浮腫みで膨れ上がった顔だったことを。

その顔が、男か女かの判別もつかぬほどパンパンに浮腫んでいた顔は、風船がしぼむようにして浮腫みが取れて逆に痩せこけた顔になる。

男も女もいた。どいつもこいつも痩せこけ、眼の下に濃い隈が居座って魚の体をしていなくとも幽霊にしか見えない形相だ。

歳はどれも若くないように思えたが、よく見ると十代ほどの子供も混じっている。だが子供らしい溌剌さはなく、大人と同じく痩せこけた頬に落ち窪んだ目、そして白髪が目立つ髪の所為で顔に皺こそはないが異常に老けて、顔だけなら三十路を超えているようにも見えた。

おそらくは、それは皆この患者の家族の顔。

どれほどこの患者によって心も体も痛めつけられ、搾取され続けたのかはその生気のない顔と、目の中のぎらつく憎悪の炎でよくわかる。

「よほど、恨まれているようです、ね」

その憎悪が「邪魔者」と認識された薬売りにも向けられ始めるが、薬売りは最初から変わらずぞっとするほど美しい冷笑を浮かべたまま、言葉を続ける。

「あんたの『死にたくない』という願いで、生まれた訳じゃない。あんたを生かし続けることで、苦しみ続けた八百比丘尼にするために生ま

れたモノノ怪だからこそ、『人魚』という形を得た」
おそらく正体は人魚と何ら関係のないアヤカシが「人魚」となった理由を、被害者にして加害者、全ての元凶である患者に向かって聞こえていないのは承知の上で語る。
「重要だったのは、『八百比丘尼』を作る事だった。
復讐の為だけはなく、おそらくはあんたの延命を医者に断って死なせることも、あんたの家族は怖いのだろう。死してなお、あんたが恨んで化けて出る事が、恐ろしくてたまらない程、あんたを恐れているからこそ、生きているが文句のつけようがない今を、維持していたいというのも、あるのだろうな」
この辺りは完全に薬売りの独断と偏見による推測だが、事実からさほど外れてはいないだろう。
実際、加世子から少しだけ聞いた話によるとこの患者の家族は、患者自身の所為で入院費を捻出する貯金どころか借金を背負っており、患者の怠慢と吝嗇の所為で保険等の金額保障もない為、この患者を生かし続けるのは自分たちの生活の余裕どころか、必要最低限のものすら削らなければならない。
言葉通りわが身を削って患者の命を長引かせているその様は、あの自らを食わせていた人魚と似ている。
生かす理由は復讐だけではなく、どんなに憎くてもそうしないと向こうも生きてゆけないほどに支配され尽くされた人生だったと思えば、さすがに憐憫を覚える。
しかしその憐憫を顔に表すことなく、薬売りは冷ややかな笑みのまま告げる。
「――――あんたに今まで人生を食い潰され、踏みにじられてきた者たちがその復讐に、あんたを生かし続け、苦しめ続けること。それが、このモノノ怪の『理』だ」
掲げた退魔の剣が、今度こそ正解だというように歯を鳴らす。
剣が抜かれる条件は、揃った。
＊　＊　＊
条件はそろった。

だが、薬売りは剣を人魚たちに見せつけるように、盾にするように掲げたままで、まだその剣から鞘を抜かない。
人魚たちは復讐の対象が入院しても、寝たきりになっても、見捨てるどころか直接的な嫌がらせすらせずに、「生かし続ける」という消極的で陰険な復讐しか出来ないほど、自分から何らかの行動を取ることが出来ない者から生まれた。
それ故か、憎々しげな眼で睨み付けながらも襲い掛かるのを躊躇するように動かない。
他者の命を求めて啜り奪う事、特に若いとはいえ二十代の大人である看護師や付添いの者はともかく、幼い子供まで襲い、入院が必要な程に命を奪って弱らせた挙句に、心にまで深い傷を負わせることは出来たくせに、自分たちの復讐を邪魔する者を排除することが出来ない気の弱さに薬売りは冷笑を消して、呆れたような溜息を吐く。
もしかしたら最初の浮腫んだ顔、素顔ではなく真の獲物である八百比丘尼（かんじゃ）の顔を仮面を被るように模していたのは、自分が殺しはしてないとはいえ身勝手な理由で人を襲う言い訳、「人を襲っているのは自分ではない」と言い張る為だったのではないかという考えに薬売りは思い至ってもう一度、先ほどよりさらに重くて深い溜息を吐いた。
「……少しだけ、期待をしたが……やはり、関係ないようだな。
まぁ、わかってはいたが。……『形』はとうの昔、最初に判明しているのだから……『八百比丘尼』というアヤカシが、モノノ怪となって別の『形』を得ているのか……、もしくは別のモノノ怪が、『八百比丘尼』に憑いているなんて可能性……あるはずはないことくらい」
溜息を吐いてから、呟く。
人魚や人魚の被害者でありながら最大の元凶である患者に聞かせている訳ではない、ただの愚痴でしかない独り言。
「不老不死」がキーワードとなる「人魚」と「八百比丘尼」から連想し、想像した、ないとわかっていながらも期待してしまった可能性が、モノノ怪の「真」と「理」を得たことで完全に潰えたことに対する愚痴を吐き出す。

富士野はやはり、運悪く発作で死の淵に立たされた時にあの人魚を見てしまっただけで、無関係と言える存在だった。
あの光の中で薬売りが見た記憶からして、富士野はわざと糖尿病が悪化するように甘味を言われるがままに持って来て食べさせていたこの患者の家族の思惑に何らかの拍子に気付いて、その結果であるこの生き地獄に生まれ故郷の伝承、「八百比丘尼伝説」を連想したのは間違いないので、もしかしたらその連想がモノノ怪の「形」を得るきっかけになったのかもしれないが、そうであっても彼女に非や責任はない。
その連想がなければ違う形のモノノ怪になっていたかもしれないというだけであって、おそらく起こる出来事に大差はない。
むしろ、伝承の中では寿命以外に人死にがない「八百比丘尼伝説」を連想したからこそ、こちらの人魚も人死にを起こすほどではなかったかもしれないので、富士野の連想はファインプレーだった可能性の方が高いくらいだ。
加世子はもちろん、火鳥も人魚が求める獲物の条件、生命力が溢れている若者という条件に合ったから襲われただけ。
彼女たちは全員、このモノノ怪たちにとっては端役どころか裏方ですらない、自分たちが「人魚」である為の材料でしかなかった。
関係などなかった。「彼女」とは、何一つ。
薬売りが勝手に、「不老不死」という部分に反応して期待しただけだというのを思い知らされたからか、彼は少しだけ疲れたような顔をして、自分を睨み付けるだけで襲い掛かる事も出来ない、臆病で卑怯な人魚どもに言った。
「あんた達は、富士野さんに感謝した方が良いです、よ。
そりゃ、彼女は生命力に満ち溢れているでしょうが……、本物の人魚ならまだしも、あんた達では、『あれ』に敵わない。
結局、結果は俺か『あれ』か程度の違いで、似たようなもんだとはいえ、自分たちの敵だとわかっている相手にある程度、覚悟を決める時間をもらってから、清め祓われるのと……、獲物だと思っていた、獲物でしかなかった相手に不意打ちで、灰すら残さず、焼き払われるの

じゃ、――俺の方がマシだろう？」
それはわずかな同情と覚悟を決める為の猶予を与える言葉。
薬売りとしては無関係な者を多数、復讐にしても消極的で無意味な自己満足の為に巻き込んでいながら、自分でその罪という責任を取ろうしない人魚たちが気に入らないが、ここまで心が畏縮するほど虐げられてきた人生には同情している。
なんだかんだで死人が出ていないのが決め手となって、少しだけ恩情を見せてみたのだが、やはりその優しさは逃げ出すチャンスがあってもそれをせず地獄に居残り続けたくせに、被害者意識に凝り固まって傷つくのは嫌がり、自分の犯した罪から目を逸らす卑怯者どもには通じない。
薬売りの言葉から優しさは読み取らず、受け取らなかったが、「清め祓う」という言葉、自分たちを傷つけて消し去ろうとする意志には過剰に反応して人魚どもの顔が再び浮腫んだ、重篤の糖尿病患者、獲物の八百比丘尼と同じ顔になる。責任転嫁の仮面を被る。
自分の罪と向き合わない人魚どもに、薬売りの眼が不快そうに細まった。
脳裏に自分の罪、誰かの為に自分を投げ出しても助けようとした献身を「罪」として受け入れ謝罪し、その慈愛を失わぬまま、これ以上「罪」を犯さぬようにしてゆく方法を考えて宣言した少女が浮かんだから、彼女と人魚の落差がその不快感を強め、懐いていた同情を完全に消し去る。
自分ではないという言い訳の仮面を被った人魚どもは、楽しげに笑いながら歯を鳴らして薬売りに襲い掛かる。
しかし、もう薬売りが剣を抜くことに躊躇う理由はない。
「『形』と、『真』と、『理』によって……」
掲げていた剣から手を離すが、薬売りの手から離れても剣は空中に浮かび上がっている。
そしてそのまま薬売りが両手を上げると剣も同じ高さに浮かび上がり、柄の鬼にも白髪の猿にも見える頭は大きく口を開けた。
同情も、そして「あのモノノ怪」の真と理を得られるかもしれない

という期待を失った人魚は、薬売りにとってはもはや「獲物」ですらない。
ただ、義務的に消し去らねばならぬ芥同然。
「剣(つるぎ)を――――解き、放つ!!」
掲げていた腕を左右に下ろすと同時に、柄の頭も子供のような甲高い声で同じように「トキハナツ!!」と叫び、退魔の剣は抜かれた。
脇差程度の鞘が抜かれて現れたのは、この病室も両断できそうなほどの長さを持つ、火柱のような、いくつもの光を束ねた異形の刀身。
その異形の剣を握るのは、同じく異形の男。
薬売りに似ているようで全く違う、別人に見えて同一人物に思える金色の男は自分に襲い掛かる人魚に向かって無造作に剣を振るう。
たったそれだけで全てが終わる人魚は、やはり本物には程遠い泡沫の「不死」だった。

＊　＊　＊

「……薬売りさん、大丈夫かしら?」
「大丈夫です」
モノノ怪の領域から現実に戻った富士野の病室に残された加世子が呟いた言葉に、火鳥は即答で応じる。
「剣を抜く条件が揃ったのなら、あの人は無敵です。絶対に、大丈夫なんです」
火鳥の言葉は不安を紛らわせるように自分に言い聞かすのではなく、確信に満ちた力強いものだった。
それは前回の幕引きを知っているからにしても過剰と思える信頼だと加世子は少しだけ思ったが、そんなことを指摘するのは無粋どころかただの嫌がらせだ。
そもそも、あの呟きこそ自分が弱いから現実逃避に零した無関係の言葉。
薬売りを案じる思いは決して嘘ではないが、加世子の本心はただこの現実から目を逸らしたかっただけ。

心電図はもはや1分に2，3度しか波を描かない。呼吸は部屋を静かにした上で耳を澄ませていないと聞き取れないほど弱々しい。
もう富士野に残された時間はわずかであることを思い知らせるこの空気が嫌で、逃げ出したかったから上げた話題に過ぎなかった。
けれど、そんなことは許されない。
人魚の所為で服が全部じっとり湿って、気持ち悪いわ寒いわで着替えた方が良さそうなのに、火鳥は加世子が持って来たタオルで最低限の水気を拭っただけで、富士野の傍らに座って手を握って離さないから。
このもう終わるしかない現状から逃げる言い訳、ただただ悲しい思いをするだけの瞬間を見なくて済む理由なら十分すぎるほどあるのに、その現実から逃げようとはしない火鳥がいるから。
だから加世子も、医者を呼ぶという看護師としての職務を放棄して、ただ火鳥の傍らで同じように富士野の最期を見届けようとする。
助かる余地があるのなら一秒でも早く、医者を抱えてでも連れてきただろうが、そうじゃないのなら加世子は呼ばない。
看護師としては失格かもしれない。けれど、歳が離れていても友人のように思っていたから。だから加世子は、友人としてすべき行動を優先した。
ただひたすら無言で、富士野の人生が終わるまでのあと数分間を見守り……と言えば聞こえがいいが、実際は何もできない無力感に苛まれてて待っていた。
ただ、待つしか出来なかった。ただ、自分の無力感に唇を噛みしめる事しか出来なかった。そう、思っていた。
自分が無力であることを思い知りながら、やはり火鳥ほど強くなれなかった加世子の心は逃げ場を探す。
無力であることを思い知る自分から目を逸らして、別の事に思考を割ろうとして気付く。
（……あれ？　火鳥ちゃんの髪って……ここまで赤かったっけ？）
日本人にしては赤っぽい髪の色をしている火鳥だが、赤毛と言い切れる程ではなかったと加世子は記憶していた。

けれど今の火鳥は、間違いなく赤毛だ。染めた髪独特の軋んだ痛みは見当たらない、艶やかな天然の赤毛は加世子の記憶と矛盾しているような気がする。

しかし本当に矛盾しているのかを検証することは出来なかった。

「！」

加世子の視線が、意識が火鳥の赤毛から心電図に……あまりに弱々しい波をあまりに長い間を開けて刻んでいた心電図が、まだ弱々しいが十数秒から一回、数秒から一回のペースに戻ってきた。

呼吸も浅く弱々しいが、先ほどよりもはっきりと聞こえる。人工呼吸器がむしろ邪魔に感じる。

「……おばーちゃん？」

同じく、心電図の反応に驚いて薬売りが出て行ってから外さなかった視線を心電図に向けていた火鳥が、その呼吸に気付いて視線を戻す。

火鳥がこちらを見たことに気付いたように、彼女の視線が自分の元に戻ったタイミングで、色が抜け落ちたまつ毛が震え、糸のように細いが確かにその瞼がわずかに開いた。

わずかに、隙間としか言えない瞼の奥から見える輝きが火鳥に向けられる。

人工呼吸器のマスクの中で、喉の奥に砂でも詰まっているような酷くかすれたものだったが、それでも確かな声を聞いた。

「……ひ……とり……ちゃん？」

孫娘の名を、富士野は確かに呼んだ。

「おばーちゃん！」

「富士野さん!?」

その声に火鳥だけではなく、加世子も応じる。

火鳥の肩を抱くようにして前のめりになって富士野に話しかける、嬉しげに今にも零れ落ちそうなくらい目に涙を溜める加世子は気付かなかった。

人魚の体液らしきものでじっとり濡れていた火鳥の服が、だいぶ乾いている事。火鳥の体温がインフルエンザを疑う程に高い事に気付

けなかった。
火鳥の異常に気付けぬほど、嬉しかった。富士野の意識が戻ったことが。
もちろんこれは、回復の兆しではない。ただ、最期に神様がくれたほんの少しだけの猶予であることはわかっている。
悲しみと後悔を少しでも失くす為の、最期の別れの為だけに起こった奇跡であることを理解しているけれど、それでも確かに嬉しかった。
火鳥に、富士野に最期の、別れの言葉くらい交わして欲しかったから。
加世子自身も、そそっかしい自分の看病を嫌な顔一つせずに見守ってくれた富士野と、最期に言葉を交わしたかったから。
富士野の眼が、孫と自分の担当だったちょっと騒がしすぎてそそっかしくて看病されているこちらがハラハラするような娘だったが、実に親身になってくれた看護師である加世子を映し、閉ざされる。
いや、閉じたのではなく笑ったのだろう。
怖かった。
長く生きてきて、その人生に後悔がないとは言わないがやり直したいと思う程の悔いはない。死ぬことに関しては、痛みや苦しみが多いのは嫌だ程度にしか思っていなかった。死そのものが怖いと思う程、生きること自体に未練はなかった。
それでも、ただ一つ耐えきれぬ恐れがあった。
望むものがあった。
それは死を意識し始めたから薄らぼんやりとあったものだが、ある出来事をきっかけに形を得て富士野の心に居座った。
同じ老人ホームにいた知人、親しいどころか正直言って嫌っていたし近づきたくもなかった老人の末路と、さすがにそれを憐れんで見舞おうと病室に向かった時、病室の前で聞いた中の声。
寝たきりで、もう暴言も暴力も振るう事が出来ない相手に対する、乾いた嘲笑。今までの深い恨みを永遠と垂れ流して聞かせる呪詛が、富士野の恐れをはっきりとした形にした。

あんな風に苦しみ抜いて生きることを強要されること、死んでいないのに生きてなどいない永遠の苦しみを強いられるのは怖くてたまらなかった。

けれど……けれど……、自分はあんな目に遭う訳がないことを知っていた。あんな風に生かされることなどないのは自明の理だったからこそ、怖かった。

怖くて、望んでしまった。

「独りきりで生きるのも死ぬのも嫌だ」、と。

ある意味ではあの老人よりも自分の生にも死にも、富士野は意味を見出せなかったからこそ、懐いた恐れと望みだった。

けれど、その恐れは杞憂だったことを知った。

独りではない事を、最期に彼女は知った。

孫が、火鳥が自分を看取ろうと側にいてくれた。「呼ばないで」なんて願いは、ただの意地だ。

自分の生にも死にも意味を見出せなかったからこそ、自分が生きていた所為で、自分が死ぬ所為で誰かが傷つくという結果を出したくなかっただけ。

だから、本当は看取って欲しかった。

怪我もなく、元気そうで、今にも泣きそうだけど自分のことで笑ってくれる、笑って見送ろうとしてくれている孫だけでも富士野は十分に救われた。

自分の人生に意味はあったと思えたが、けれど本当に、本当に自分の恐れは杞憂だと思い知らせたのは加世子の存在。

赤の他人、自分の面倒を見てくれたのは、関わったのはただの仕事でしかなかったはずなのに、自分が意識を取り戻したことを泣いて喜んでくれる娘の存在に救われる。

孫の存在以上に富士野は加世子によって救われたことを、加世子は知らない。

「か……よ……こ……さん……」

だから加世子は、自分が呼ばれたのはついでだと思った。

その言葉は孫のついでにくれたものだとしか思わなかった。

「――――あり……がとう……」

最期の命の灯を燃やして浮かべた富士野の笑顔も、富士野が伝えた言葉も、それは自分に向けられたものだとは知らぬまま火鳥の手に自分の手を重ね、火鳥の手ごと富士野の手を握って加世子は応えた。

「どう、いたしまして――――」

患者が亡くなって、泣きながらも加世子は笑う。

患者が亡くなったのに、笑えたのは初めてのことだった。

加世子の胸の中を苛んだ無力感は、いつしか消えていた。

＊　＊　＊

「！　薬売りさん！」

富士野が息を引き取ったのを見届けて、火鳥には悪いと思いつつもさすがにそろそろ看護師としての職務に復帰した加世子が医師を呼ぼうと廊下を小走りしていたら、自分は怪しくないと言わんばかりに薬売りは悠々と前から歩いてきた。

「薬売りさん！　人魚の件は終わったの？」

「……ええ。終わりました、よ」

「なら良かった。お願い、薬売りさん。火鳥ちゃんの傍にいてあげて。……つい、今さっき富士野さんが……」

加世子も加世子で富士野の死のショックと薬売りに慣れてしまった所為か、こんな奴が火鳥と一緒に富士野の病室にいたら、医師や他の看護師たちに何て言い訳したらいいかわからなくなるという当たり前の想像が出来ず、ただ祖母が死んで独りきりで病室に取り残された彼女を案じて、「傍にいてあげて」と頼み込む。

加世子が最後まで具体的なことは言わなかったが、何があったかなんて薬売りはすぐに察して、少しだけ富士野を悼むように神妙な顔をしてから、「わかりました」と応じてくれた。

「……ただ、間に合えばいいんですけど、ね。
俺としても、どこかにまた飛び立たれては、探し出すのが面倒だから、なるべく眼は離したくないんです、よ」

応じて、富士野の病室に向かう薬売りが独り言を呟いていたが、少しでも早く火鳥の元に戻ってやりたいと急ぐ加世子の耳には届いても意味までは考える余裕はなく、ただの音として彼の呟きは加世子の頭には残らず素通りしていった。
薬売りに「火鳥の傍にいてやって」と頼んですれ違ってから5分も間を置かず、加世子は富士野の病室に医師や他の看護師たちを呼んで戻ってきた。
「あれっ？」
戻ってきて、呆けた。
病室には部屋に入る直前になってやっと思い至って焦った、あの極彩色の和装に箪笥のような薬箱を背負った、歌舞伎の隈取のような化粧で美貌を彩る、常識で考えれば不審者中の不審者な薬売りはいなかった。
頼んでおいてなんだが、それはむしろ加世子としては好都合だったのでまだいい。
しかし、部屋には薬売りどころか火鳥もいない。
まずはトイレか、それとも涙が止まらなくて医師たちの話も聞けそうにないから、ひとまず席を外して泣くだけ泣いて落ち着かせようとしたのかな？　と加世子は思う。
それなら、薬売りがいない理由にも説明がつく。彼が自分の頼みに応じたのは、口先だけの生返事だとは思わないから、彼女を気遣って一緒に出て行ってやっていると解釈する。
彼はそっけないようで、火鳥の事をとても大事にしているように思えた。
まるで妹か大切な友人か何かのように、色恋ではないがそれと同じくらい深く大切に慈しんでいるからこそ、火鳥の自分を軽んじるような行動に対してあんなにも真剣に怒ったという印象を加世子は持っ

ていたから、そう思った。
だから、医師が改めて脈拍や瞳孔を見て生命活動が完全に停止しているのを確認している横で、言われる前に、自分以外の誰かが指名される前に自分で名乗り出る。
「あの、先生！　あたし、火鳥ちゃんをちょっと探してきます！」
まだ１４歳の少女に、身内の死で涙する時間を奪って、泣くことを我慢などさせたくなかった。「さっさと終わらせたい」という大人の都合で、祖母の死を悲しむ邪魔なんてさせたくなかったから加世子は自分から、唯一の身内だからこそこれから様々な手続きを行わなければならない火鳥を探すと言ったのだが……。
「？　何を言ってるんだい、野本くん？」
「へ？」
医師は困惑した顔で、訊き返す。
加世子の提案の意味がわからないと言いたげな顔に、思わず加世子も「意味がわかんない」と言いたげな顔をして間抜けな声を上げてから、やや混乱しながらもう一度提案してみる。
「え？　いや、皆さん忙しそうだし、私がひとっ走りして火鳥ちゃんを探しに行きましょうかって言ってるんですけど……。
手続きにあの子、いりますよね？　唯一の身内のお孫さんなんだから」
しかし加世子が話せば話すほど、医師が浮かべる表情から困惑は濃くなっていった。
医師だけではない。加世子が周りを見渡せば、他の看護師たちも医師と同じ顔をしている。
困惑７、薄気味悪さ３くらいの割合の表情を浮かべ、看護師長は加世子に言った。

「……野本さん、あなた他の患者さんと富士野さんを間違えてない？
富士野さんは独身で、お孫さんどころか親兄弟もだいぶ前に皆亡くされている、天涯孤独よ？」